

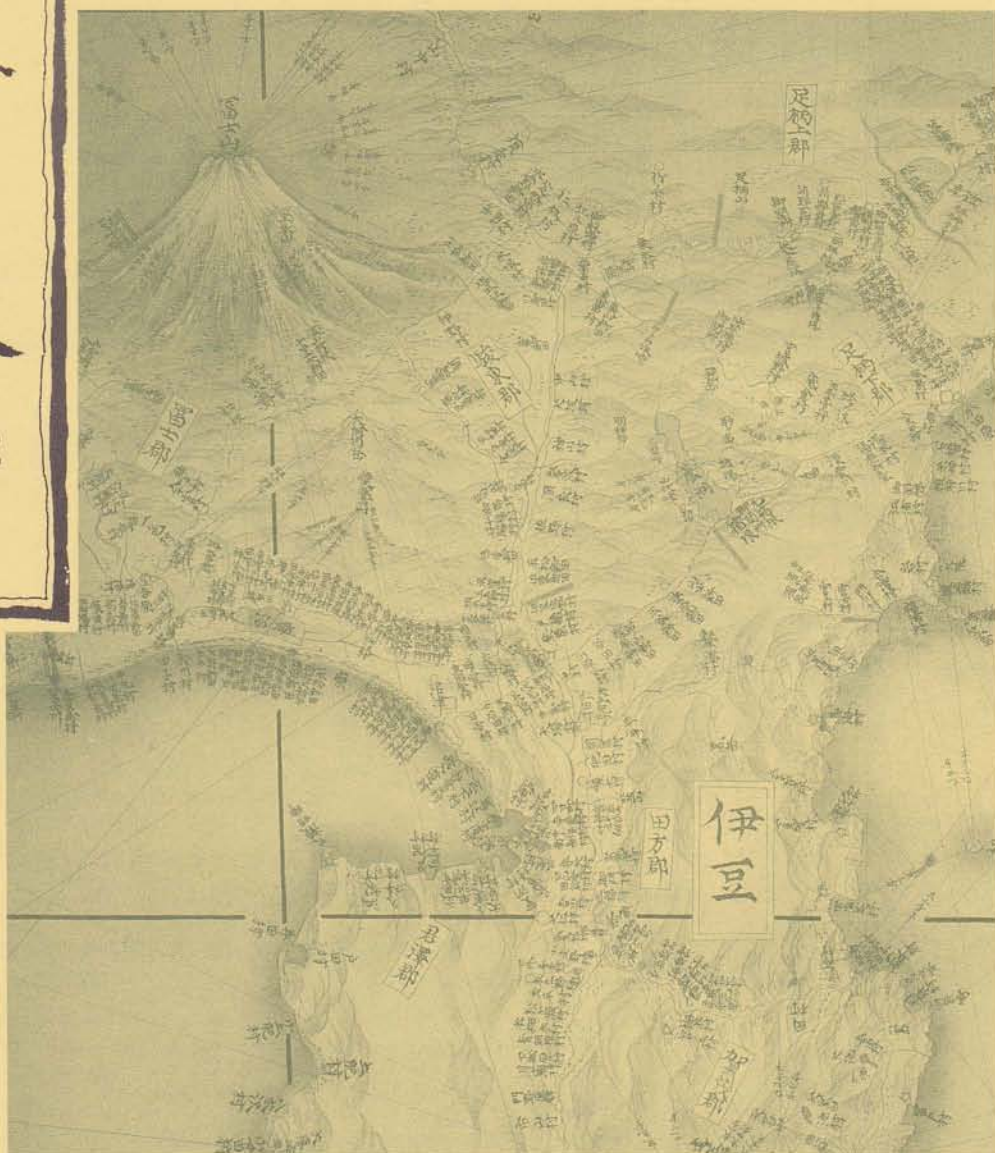
伊能忠敬

研究

季刊

史料と伊能図

一九九六年春季号



「伊能図探求」継承 第七号

伊能忠敬研究会

表紙図解説（フランスにあった伊能中図）

表紙は去る十一月十七日から三日間、佐原市で公開された、パリ郊外に住むフランス人イブ・ペイレ氏所蔵の最終版伊能中図の富士箱根付近である。富士山に向けて各地から無数の方位線が引かれており、それぞれに十二支による方位が記入されている。方位線は地図完成後は不要であるが、中図・小図では図の華麗さと正確さを強調するために残されたのではないかといわれている。

実物では朱の細線で描かれ、地図上に彩りを添えている。各地の目標にも同じように方位線が引かれているが、同一の図でも本数は必ずしも同じではない。地図仕上げの丁寧度とか完成度に関係があるかも知れない。富士山への方位線は、成田山仏教図書館の中図では三七本、東京国立博物館の中図でも三七本、フランスの中図では三九本を数えられる。

伊能図は手書き図であるため、文字、記号など、往々にして描き洩れ、記入洩れなどもありうる。表紙図の範囲について、地名、郡界、国界、社寺記号、天測記号、等の洩れの有無を調べてみると、フランスの中図はなかなか充実していることがわかる。

（渡辺）

（題字は忠敬の筆跡）

目次

（表紙写真解説） 目次

「伊能忠敬研究」発刊の御挨拶
お祝いのことば

「伊能忠敬研究会」の発足を祝して

「伊能忠敬研究」への期待

「伊能忠敬研究会」発足に寄せて

研究会発足に寄せて

ご縁がありまして

伊能家関係文書（書簡）について

もう一つの忠敬の家訓

伊能測量の地方史料求む 史料紹介

（伊能忠敬測量日記）

測量日記連載にあたって

現代地図に測量隊の足跡を辿る

測量日記解題

第六次測量日記（一）

フランスにあった伊能中図フォーラム

伊能図探究 七

東京大学総合研究資料館蔵 伊能中図

伊能三郎右衛門家（自蔵） 測量下図等

山口県文書館毛利文庫蔵 伊能大図

お知らせ

入会案内・投稿規定・編集後記

（裏表紙） 英文目次

渡辺 一郎 1

野々村邦夫 2

鈴木 全一 3

小島 一仁 4

香取 禧良 4

佐久間達夫 6

伊能 陽子 7

安藤由紀子 9

渡辺 一郎 14

編集部 15

編集部 16

清水 靖夫 16

渡辺 孝雄 18

佐久間達夫 21

広報「さわら」 26

伊能日本図探究会 28

編集部 32

編集部 32

「伊能忠敬研究」発刊の御挨拶

渡辺一郎

伊能忠敬については、戦前に教科書等で大きくとりあげられ、国威発揚に使われ過ぎたためか、戦後は生誕二五〇年の昨年もそれほど注目されただけではない。しかしながら、彼の人と事績は、高齢化社会の今日、原点に戻って研究されてよいと思われる。現代の伊能忠敬像は、

一、全国測量と初の科学的日本地図制作を二つ目の事業として完遂した。家業を建て直し、齢五〇才から破天荒な事業に挑戦し成功した。高齢化社会、生涯教育が喧伝される今日の先覚的存在である。

二、家業の傍ら、天文、測量、暦数を学び、当時としては異例の精密な日本地図を制作した、科学技術者の大先輩である。

三、制作された伊能図は、江戸時代よりも明治以降の近代日本の建設に際し、国土基本図作成に利用され、非常に役立った。

というようなところにある。

一方、伊能忠敬研究の現状をみると、残念ながら、大正六年の大谷亮吉著『伊能忠敬』と戦後の保柳睦美著『伊能忠敬の科学的業績』のあとは、地元の小島一仁氏、佐久間達夫氏が頑張っておられるのみで、まとまった研究は発表されていない。

その原因の一つに、伊能家文書が公刊されていないことがあげられる。伊能家文書の大部分は伊能記念館に寄付され、あるいは伊能記念館の保管となっているが、伊能家には今なお五〇〇点余りの文書と地図が残っている。その他にも日本学士院には大谷亮吉氏収集の写本類が、成田山仏教図書館には小原大衛氏収集の忠敬研究資料が存在する。また、伊能測量に際し、幕府の指示で沿道・沿海の諸藩と領民がおこなった膨大な協力の様子は、熱心な研究者により、旧藩あるいは地

元の文書から発掘されつつあるが、いまだ知られていないものも多数予想される。

これら基本史料を掘り起こすことは、忠敬研究に少なからざる寄与をなすものと考ええる。我々の第一の課題はまづ、伊能家に残存する未公開文書の公刊であり、順次、他に及ぼしたいとおもう。未公開伊能関係文書の活字化は本研究会の一つの柱である。

つぎに、伊能測量は忠敬ひとりの成果ではなく、隊員一人一人と、協力した沿道・沿海の関係者の膨大な協力の結果である。各地の熱心な研究者のご協力を得て、受け入れ側からみた伊能測量隊の姿をはっきりさせたいと考えている。これが第二の柱である。

伊能測量の成果としての伊能図については、今日、原図が失われて久しいとはいえ、各地にはなお、可成りの写図が残存しているとおもわれるが、所在すらも明確でない。各地の伊能図を探し出して、台帳をつくり、これらに一定の位置づけを与えることが望ましい。また、地図の内容と明治以降の活用についての調査研究も深めたい。第三の柱である。

伊能忠敬に並々ならぬ関心をお持ちの方々は、全国におられるが、その交流も我々の重要な役割と考えて、誌上のほか、可能なかぎり交流の実現し、研究会を持ちたいと思う。伊能記念館のある佐原に来訪され、史料等を特別に見学する機会など設けるよう努力したいと考える。第四の柱である。

これらの目的達成のため、機関誌『伊能忠敬研究』を年4回発行することとした。ただし、『伊能図探究』を継承するため、発行は七号からとなることをお断りしたい。当面は三六頁だが会員の増加にともない増頁したいと考えている。諸兄姉の御参加と御寄稿をお願いする。

(わたなべ いちろう 伊能忠敬研究会副会長)

お祝いのことば

野々村 邦夫

「伊能忠敬研究」の創刊を心からお喜び申し上げます。また、このようなユニークで、格調高い研究誌の実現に力を尽くしてこられた渡辺一郎さん始め関係者の方々に対し、深く敬意を表させていただきたいと思ひます。

本誌は、小冊子ながら貴重な学術資料として愛読されてきた「伊能図探究」を母体とし、これを発展的に継承したものです。「伊能図探究」を舞台とする調査研究の過程では、イギリスにあった伊能小図の現地調査を行い、その複製を作るとか、フランスで眠っていた伊能中図の一時帰国を実現するなど、渡辺さんを先頭にめざましい活動が展開されてきました。全国津々浦々の伊能忠敬の足跡上では、地図、史料その他新しい発見もまだまだ有り得るでしょう。順調な発展の上に、大きな飛躍が期待されるところです。

それにしても伊能忠敬という人物は、ご本人の能力、努力の凄さとともに、人に恵まれたという点で幸せだったと言われます。彼もまた、人間関係を大切にす人だったのでしょう。そうでなければ、没落した商家を再興したり、大勢の測量隊を指揮して全国行脚をし、立派な成果をあげられるわけがありません。没後百七十年余の世の中に、知的好奇心に満ちた人々により、「伊能忠敬研究会」という彼を囲む人の輪ができているとは、何と素晴らしいことでしょう。伊能忠敬の業績を事実にして明らかにすることは、彼にふさわしい顕彰の方法でもあるでしょう。

末尾ながら、研究会の今後のご発展並びに会員の皆様の楽しいご活躍とご健勝とを心からお祈り申し上げます。

(ののむら くにお 国土地理院参事官)

「伊能忠敬研究会」の発足を祝して

鈴木 全一

佐原市が生んだ伊能忠敬翁は、江戸時代の世界的な地理学者として、広く知られております。平成七年は翁の生誕二百五十年ということから、佐原市といたしましても、その偉大な業績を顕彰するために、いくつかの行事をおこなってまいりました。

一つには、生涯学習啓発の一環として、自己を確立し充実した生き方をするには如何に過ごすべきか、などをテーマとして、江戸風俗研究家の杉浦日向子さんや地元の伊能忠敬研究家の小島先生、元NHKアナウンサーとして活躍された川上裕之氏等をパネラーとしてお招きして、シンポジウムを開催いたしました。

さらに、伊能日本図探究会代表渡辺一郎氏の御支援をいただいて、十一月十七日から三日間、フランスのブルゴーニュ近くのムティエ・サンジャン村で二十五年前に発見された伊能中図全八枚を、佐原市中央公民館で日本初公開するとともに、所有者のイブ・ペイレ氏も招聘して、討論会を開くなど、伊能忠敬翁の業績の顕彰に努めました。

一方、永年の念願でありました新伊能忠敬記念館（仮称）の建設については、昨年、建築の実施設計を完了し、本年一月九日には起工式を執り行いました。平成十年の開館を目的にしております。

また、市史編纂室においては、伊能家六代目の当主伊能景利が、天正時代から享保時代まで約百五十年間にわたる様々な出来ことを記録した「部冊帳」について、地元の小島先生のご支援により解説を進めているところです。しかしながら、未だ、膨大な伊能家文書、伊能忠敬測量日記については、十分な説明がなされていないことは、識者の意見の一致するところであります。

このような折りに、伊能日本図探究会代表の渡辺一郎氏等が中心となって、伊能家文書、伊能忠敬翁に係わる業績の研究を目的とする伊能忠敬研究会が設立されたことは大変喜ばしいことであります。

どうか、伊能忠敬研究会が目的としております（一）伊能忠敬翁の業績の調査・研究ならびに顕彰（二）伊能忠敬研究の基本史料の活字化（三）伊能図についての調査研究ならびに公刊、が円滑に推進され、伊能忠敬研究会が所期の目的に沿って、益々発展されるよう心から祈念申し上げましてお祝いの言葉といたします。

（すずき ぜんいち 佐原市長）

「伊能忠敬研究」への期待

小島 一仁

昨年十一月、渡辺一郎氏の御尽力により、「伊能忠敬生誕二百五十周年記念事業として」、「フランスにあった伊能図特別公開」が佐原市において行われ、大成功をおさめました。それを機として渡辺氏等の発起により伊能忠敬研究会が結成され、このたび、会報『伊能忠敬研究』創刊のはこびとなったことは、まことに喜ばしいことと存じます。

伊能忠敬および伊能図について専門に研究する組織とその機関誌が生まれたのは始めてのことであり、これは画期的なことと云えましょう。

伊能忠敬に関する学問的研究は、一九一七年の大谷亮吉編著『伊能忠敬』の刊行を出発点として、以後、現在まで八十年の間に、物理学、数学、地理学、歴史学等の分野で行われてきました。これからも専門家による研究が望まれるのはもちろんのことですが、私は、今後の研究の進展のためには、専門家でない一般の人々の協力が極めて重要であると思っています。忠敬が沿海実測を行ったことにより、全国各地には、それについての資料が多数のこされています。それとの関連で、全国には忠敬に深い関心を持つ人が決して少なくはありません。そのような人々による研究の成果や資料の発掘・紹介等に支えられてこそ、今後の忠敬研究は豊かにされ、深められていくのではないかとおもいます。この会報がそのために大きな役割を果たすことを願い、私も、皆さんと共にがんばるつもりです。

(こじま かずひと 佐原市史編纂委員長)

「伊能忠敬研究会」発足に寄せて

香取 禧良

佐原市は千葉県北東部に位置し、東流して太平洋に注ぐ利根川とこれに連なる横利根川、常陸利根川を境に茨城県に接し、北緯三五度四八分五五秒から五七分一七秒、東経百四十度二五分三五・四秒から三六分一・四秒の地域にある。現在では自らの位置を確認できる地図は大変身近であるが、佐原出身の伊能忠敬が実測する以前は、日本列島上の相互の位置関係を正確に特定することは難しいことであった。

その伊能図の一部である中図がフランスで発見されたということは新聞で承知していたが、昨年十一月、伊能日本図

探究会代表の渡辺一郎氏の尽力により、その伊能中図の所有者フランスの国立農業高専教授イブ・ペイレ氏が、地図を携行して来日され、佐原で日本初公開された。伊能図は佐原市の伊能忠敬記念館にも多数所蔵しており、成田山の伊能中図、建設省国土地理院の伊能中図など特別展示等で拝見し、一応の知識を持っている積りでいたが、ペイレ氏の中図を日本列島の形に展開して、身近にみると、丁寧な描画に色彩豊富で、記載内容が充実、などあらためて強い迫力を感じた。しかも、この図がパリから二百キロ以上離れた人口三百人の小さい村の民家の屋根裏で、ある時偶然に発見された。何時渡仏したかの手ごかりは全くないとの話を聞くと感無量である。

ペイレ氏夫妻を展示二日目、伊能忠敬記念館、忠敬旧宅、香取神宮等に御案内し、伊能忠敬を生んだ佐原の街を説明したが、夫妻は大変礼儀正しい真摯な方達で、夫妻を囲んでの討論会、歓迎レセプション等では、額に汗をにじませた、真剣な表情が大変印象的であった。

このたび、渡辺一郎氏の提唱で「伊能忠敬研究会」が発足することとなったが、この研究会は伊能図の調査研究以外に忠敬翁研究の基本史料の活字化も目的に掲げており、大変意義のある興味深いものと確信している。例えば、伊能忠敬測量日記一つとっても、昭和六三年に千葉県史料として文化三年までの分を解読し刊行されたが、まだ全体の1/3に過ぎない。最近、郷土史家某氏の、忠敬の寛政五年の伊勢参宮、関西旅行記の解読を拝見したが、忠敬翁の実証的、実践的な面をあらためて再認識したところである。測量家伊能忠敬の、人物、哲学、行動等のすべてを対象とし、究極の成果である地図まで研究する「伊能忠敬研究会」の今後の推移は注目に値すると思う。

御発展を心からお祈りします。

(かとり きよし 佐原市教育委員会 教育次長)

研究会発足に寄せて

佐久間 達夫

江戸時代の後期、男子の平均寿命が四〇才余りの時代に、五〇才で隠居して江戸へ出て学問に励み、北の果て北海道から南の島種子島まで、約四万キロの測量の旅をし、最新技術を駆使したヨーロッパ諸国の地図に較べて遜色がない精密な大日本沿海実測全図を作成した伊能忠敬。

私が忠敬と初めて出会ったのは、昭和六二年の四月である。ポツダム宣言受諾により第二次世界大戦が終結して間もない昭和二四年に教職につき、戦後の三八年間、公立小学校に勤め、昭和六二年三月に退職し、四月より佐原市教育委員会で管理する伊能忠敬記念館に勤務するようになったからである。

記念館には、忠敬の遺書・遺品二五種、九六一点が保管展示されていて、いずれも歴史資料として国の重要文化財に指定されている。これらの遺書・遺品のなかで特に私の心を捉え、私の第二の人生の道標となったのは、忠敬が五十才を過ぎてから十七年間にわたって、日本全国を測量しながら綴った「日記」と「測量日記」である。日記や測量日記には、十次にわたって測量した、三七五三日の日々の様子（天気、通過した街道、宿駅、村高、支配、家数、人数、案内人、来訪者、本陣・脇本陣の名と家作の良否、諸藩からの贈答品とその処理方法、街道筋の寺社名所とそこに保管されていた書画骨董名など）が一日も欠かさずに、一字一字丁寧に記されている。

そこで、私の第二の人生のライフワークとして、斯界において初めての測量日記二八冊の解説と活字化を志した。幸いに、佐原市教育委員会や、伊能三郎右衛門家十六代当主故伊能敬氏、佐原古文書の会の

小島一仁氏等の御指導と御協力をえて、完成までに二年三ヶ月かかり、平成元年八月に全巻の活字化が完了した。

それ以後、記念館は退いたが、人間忠敬の魅力に惹かれて、これまでの不明部分に焦点をあて研究を続けてきた。関係者の自宅を訪問したり、電話・手紙などで問合せたりしたが、調査結果をまとめ「新説・伊能忠敬」と題して平成六年二月に自費出版することができた。

平成七年十一月に忠敬の生誕二五〇年を記念して、佐原で「伊能忠敬フォーラム」が開催され、それを機会に伊能日本図探究会代表の渡辺一郎氏が発起人代表となり、「伊能忠敬研究会」が発足し、私もその一員に加えていただいた。会員の方々と忠敬の業績や生き方について調査研究ができると思うと、喜びと意欲が湧き上がる思いである。

この会が、忠敬の実証を重んじた生き方のように、会員同士気軽に資料の交換や話し合い等を行い、忠敬の実像の把握に一步でも近づけたらと願っている。会員の皆様の温かい友情と限りない御健勝を祈念します。

(さくま たつお 元伊能忠敬記念館館長)



ご縁がありました

伊能 陽子

『花万朵忠敬記念館今日開く』

春光や庫の豊に並ぶ家紋

鳥かへる守りつききし遺品の数

忠敬記念館落成

かねて夫康之助は 忠敬遺品の散逸と破損を恐れ 何とか保存の方法をと考えていた。折から国と県と市との協力により、旧宅地内に耐震耐火の記念館が建つことになったので、重要文化財の指定を受けている忠敬遺品二一五点と、史跡に指定されている忠敬旧宅を、佐原市に寄贈した。そのため散逸の恐れもなくなり、後学の人々の研究にも便利になったことを、夫は喜んでいた。昭和三十六年四月三日、盛大な開館式が行われた。』

これは母・多嘉子が傘寿の記念に、上梓の句集「夕顔」に載せたものである。

この年、私は次男洋と結婚して伊能家の一人になったのであるが、伊能家のことは全く何もわからずに、田舎の家、即ち忠敬旧宅で遺品の整理をする母の指図通り蔵の中からあれこれと運び出したり、片付けたりしていた。蔵の門や長持ち、連子窓などに、時代劇のなかに居るような錯覚をおぼえたものだ。特に、床の間に江戸時代のお雛様を飾って寝た夜の、あの不思議な興奮は二度と味わえないと思う。現在「忠敬の書斎」として見学されている部屋である。

この家に生まれ、八十八歳の天寿を全うするまで、忠敬遺品を守り、数十年にわたって毎日のように訪れる大勢の見学者に、懇切丁寧な説明をするという仕事を続けた祖母孝は忠敬から五代目にあたる。祖母の功績の大きさは母から聞かされていたが、まさか私にその何分の一かの仕事がまわってくるとは、当時夢にも思わなかったことである。因に、当時の芳名録をひもといてみると、大正から昭和初期の学究・文化人とはもとより、財界、陸海軍の著名人の署名が並んでいるのに驚く。伊能忠敬の足跡を一度は訪ねたいと、かくも多くの方々が佐原まで足を運ばれたのかと、忠敬の偉大さを再々認識させられる思いである。そして一応の片付けが終わったのち三百年前の埃も一緒に、記念館に収められなかった反古、ガラクタなどが世田谷の家に移された。

両親と一緒に暮らしながら、父の源空寺参り（忠敬の墓は菩提寺・佐原観福寺のほかに浅草の源空寺にある。）のお供をしたり、各方面からの問い合わせを母に取り次いだりしているうちに、「忠敬先生」という存在は次第に身近になっていった。そしてあのお雛様も、毎年箱からとりだして、お顔のひび割れがひどくなっているのを見て、そっと並べていたのだが、その時もまだ、お雛様や雛道具を包んである紙に、地図の線が入っているなどとは全く気がつかなかった。

ある日、息子たちの卒業した小学校の社会科の先生から「伊能忠敬」を授業で取り上げるので、何か資料がありませんかとのお話があった。納戸の隅からダンボールの箱を引きずり出し、ボロボロの紙をつまみ出したときの先生方の驚きように、私たちの方がびっくりしてしまった。大変貴重なものということなので、慌てて夫は表具屋に問い合わせたところ、数十万円はかかると言われ、ため息をついた。そして向こう見ずな素人の強さ、こわさで、友人の母上が裏打ち表装をなさると小耳にはさむと、私は強引に弟子入りをした。一対一で裏打ちの手は

どきを受け、改めてダンボール箱の中の反古を一枚ずつ見たのである。

初めのうちは、字も読めず、ただクシャクシャの紙がきれいになり、墨の色が鮮やかに残っているのに感動していた。或るとき、祖母の着物がしまつてある畳紙に、地図らしきものが張り込んであるのに気がついた。昔の人は畳紙を、紙を張り合わせて自分でつくったのであろう。恐らく伊能の家には、地図の下書きなどの紙が積んであったとおもう。そつとはがしてみると、緑の山、朱色の文字がきれいに出て来た。虫食いだらけの紙から八王子、福生、拝島など馴染みの地名が読めると、嬉しくなり、箱の中からあれこれと引っ張り出した。大福帳の裏に見慣れた忠敬自筆の草稿をみつれたりするが、古文書の素養のない私には、殆ど何が書いてあるのか分からないものばかり。母も整理をかけて、分類らしきことをしていたが、八十才を迎えて体力もなくなり、気に掛けながら諦めていたようだ。そして、私が裏打ちの勉強をはじめ、反古の山に手をつけ始めたことを、殊の外喜んでくれた。

秋明ら娘は古文書を読み継ぐと

と詠んでくれた母はその半年後他界した。

反古の山を抱えて、母の続きをしたくても読めなくては どうしようもない。そんな時、世田谷区の古文書講座の開講を知る。八十才過ぎから、また古文書の勉強をしようとしていた母の意欲に驚いていた私は、すぐに講座に参加し、以来生涯学習としてつづけている。

現在手許で整理をしている資料の経緯をまとめてみようとなると、自然な成り行きのなかで「縁」としかいいようのない力を、感じざるを得ない。私の意志が強く働いたわけではないのに、時々遭遇することが、縁の糸になって結び付き、伸びて行き、広がっていったようだ。若いときは、むしろ敬遠したくなる「ご縁」も、年を重ねる

につれ「ご縁探し」が楽しくなるものらしい。

そして次なる「ご縁がありまして」は、強力な助っ人安藤由紀子さん。彼女は私の夫の佐原小学校の級友、共に疎開のため数年間佐原で過ごしている。長年国会図書館で仕事をしていた彼女は、私にとって願ってもない協力者。整理のイロハから教えられ、勉強と一緒に始めて十年近くたった。今回の「伊能忠敬研究会」の発足で「オバサン二人の老後の楽しみ」を、もう少しがんばってまとめてみようという機会が、あたえられたわけである。

「伊能忠敬研究会」の渡辺一郎さんとのご縁は新しく、「フランスの伊能図と渡辺さん」の記事を新聞で拝見し、古くからの友人金窪さんのご主人（日本地図センター理事長）を介して初めてコンタクトをとったのが昨年五月である。そして十一月の朝日新聞の掲載、佐原でのフォーラムと短い期間に何人もの方々とご縁が繋がった。

この会報で、全国の忠敬ファン(?)との交流がどのように広がっていくか期待される。

柳の芽史跡の軒の古りにけり

春愁や伝え来しもの手放して 多嘉子

やっと母の心が、分かってきたところである。

そして、昨春亡くなった兄、敬の「忠敬さんのこと、頼むね。」という言葉を励みとしながら、先ずは世田谷伊能家文書の由来を、書き留めた次第である。

(いのう ようこ 伊能家)

伊能忠敬関係伊能家文書「書簡」について 安藤由紀子

伊能忠敬関係伊能家文書は、次の三群に大別される。

〔一〕 伊能洋保管伊能家文書（以下世田谷伊能家文書とする）

〔二〕 伊能忠敬記念館所蔵文書（以下記念館文書とする）

〔三〕 伊能忠敬記念館保管伊能家文書（以下記念館保管文書とする）の三群である。

このうち公刊されているのは、〔二〕の記念館文書のなかの伊能忠敬書簡二五巻・一六〇通と、測量日記の一部で、千葉県史料・近世篇ほかに、収められている。

未公刊のものを活字化してゆくにあたって、文書全体を書類と書簡に分け、まず書簡の目録を作ってみたところ、第一群二六七点、第二群二四九点、第三群一四四点、総計五三〇点となった。

第一群で注目されるのは、忠敬自筆の下書き類、測量に従事した天文方下役・内弟子のもの、測量先各藩で世話役を勤めた藩士のもの、などが可成りみられることである。測量の現場が目に見えるような書簡もある。

第二群は、公刊ずみの忠敬書簡をはじめ、「国指定の重要文化財」に相応しい史料であり、高橋景保・江川英毅など、活字化の待たれるものが多い。書類に分類すべきものもあるが、きちんと整理されずに巻き物に表装されているため、便宜上点数に数えてある。

第三群は、忠敬以前のもので、文化財の指定から外されたものと思われるが、妻みちの忠敬宛書簡などが含まれていて面白い。これらは、小島一仁氏ほか作成による目録から、抜書きさせていただいた。

〔二〕 世田谷伊能家文書（書簡） 目録

あ	い
(筆者)	
足立左内	荒木丈右衛門 東嶋平橘 渋谷順四郎 伊能忠敬 伊能みち 伊能景敬 伊能忠誨 伊能いね 伊能秀蔵 伊能政久 伊能権之丞 飯高惣兵衛
(筆者の概要など)	
(信頭) 大阪鉄砲組同心の頃、高橋至時、間重富と共に麻田剛立に学ぶ。文化六年出府を命ぜられ、「作暦測量御用手伝い」となる。のち天保の改暦を手掛ける	佐賀藩鍋島家、家臣 下書き・覚書き・断簡 忠敬妻 忠敬長男。文化十年父の九州測量中没。四八才。(妻りての代筆を含む) 忠敬長孫。文化一〇年父景敬の死により家を継ぐ。翌年出府、天文学を修め「天文方雇」文政十年没。二一才 忠敬長女。夫の死後伊能家にもどり、妙薫と称す。家政をとり仕切り、測量の裏方を勤める 忠敬庶子。第一〜六次測量参加。のちその素行により父に勘当される
(歳)	
1	1 36 16 1 2 6 1 1 1 1

え			お			か		
飯高吉太郎	潮来屋	井上治右衛門	一助	磯村佐兵衛	一宮重郎衛門	江川太郎左衛門	江戸家作管理者	尾形謙二郎
生村名主、網元、干鯛問屋。江戸北町奉行組与力給知の上総地方代官。年貢割付け役	惣兵衛長孫	伊能家用人。江戸家作管理・訴訟代行	江戸家作借家人	(英毅) 伊豆・相模・甲斐支配高六万石の代官。英竜(坦庵)の父。天文に興味を持ち、測量の必要性を理解し、忠敬に書簡による講義を受けた	無署名	数学者会田安明実子。忠敬内弟子。第二、五次と第八次測量参加。幕臣渡辺家を継ぐ。	「伊能東河先生流量地伝習録」編述	天文方又は勘定所出仕
1	1	1	7	1	1	6	1	1
加納屋次兵衛	香取隠居	川口源次	菊地儀助	久保木清淵	恵仁	坂部貞兵衛	小川市右衛門	落合仙助
(大川) 津宮村の人。江戸両替商。伊能家の帳元締	(春興) 高橋景保手下役。文化十一年より作図に従事。シーボルト事件判決「中追放」	(太郎右衛門・蟠竜) 津宮村名主。漢学者。忠敬親友。寛政年間伊勢旅行を共にする。孫忠誨の師。伊能家家事、地図完成に尽力。幕府上呈の「沿海実測量録」を浄書し序文も書いた。「古文孝経独見」・「補訂鄭註孝経」他著書多数	佐原村観福寺僧侶	(惟道) 幕府御先手同心。古川謙の門下で数学を学ぶ。暦局出役。高橋景保の手付下役。第五、八次測量参加。技術力・統率力に優れ、忠敬の右腕。前後八年間、測量の中核となる。業成る直前、五島列島、福江島で没。四三才	伊能三七郎長由(忠敬義父)(カ)	(王弼) 高橋景保手下役。第六次測量(四国)参加。以後暦局員	(政五郎) 古川謙門下。高橋景保手下役。第五、七次及び十次測量参加。製図の才あ	越知弁左衛門
5	1	1	1	2	2	12	14	1
勝雄	勝久	加藤嘉平次	勝之丞	勝久	勝雄	勝久	勝雄	勝久
1	1	1	1	1	1	1	1	1

- 11 -

ま	ふみ	松元十郎兵衛	薩摩藩士。測量世話役	1
		松野茂右衛門	忠敬門人	1
		牧山有倫	(仁兵衛)平戸藩主松浦肥前守家臣	1
		松浦加太夫		1
み		南里格治	柳川藩家臣	1
も		森村太郎左衛門		1
や		保木敬藏	(永蒼)忠敬内弟子。佐原村地頭津田山城守家臣の渡辺清藏の親族。第八・九次測量参加。地図完成に尽力。足立左内の門下となる天文学者。堀田摂津守(若年寄)家臣(カ)日向延岡藩内藤家、家臣。測量世話役	3
よ		山田綱次郎		1
り		吉田律右衛門		1
ろ		りさ		1
わ		六兵衛		1
		渡辺清藏	佐原村地頭津田山城守家臣	8
		脇甚三郎		1
		不明(無署名)		2
計 二六七点				

〔二〕記念館文書(書簡) 目録

(整理番号)	(書簡名称)	(点数)
五九	伊能忠敬書簡	二五卷 計一六〇点
八三	(公刊ずみ)	
	伊能景敬書簡	三卷 計二二点
八三ノ一		6
八三ノ二		7
八三ノ三		8

八四	高橋景保書簡(公文書、高橋至時・間重富書簡を含む)	二卷 計三〇点
八四ノ一		17
八四ノ二		13
八五	江川太郎左衛門以下諸家書簡	四卷 計三八点
(整理番号)	(筆者)	(筆者概要)
八五ノ一ノ一	江川太郎左衛門	既出
八五ノ一ノ二	"	
八五ノ一ノ三	"	
八五ノ一ノ四	"	
八五ノ一ノ五	近藤守重	(重藏)北地探検家。エトロフ島に「大日本恵土呂府」の木標をたてる。のち書物奉行著書多数(五郎兵衛)大阪の天文学者。寛政の改暦を行う。高橋至時とは麻田剛立の同門
八五ノ一ノ六	間重富	既出
八五ノ一ノ七	飯高惣兵衛	既出
八五ノ一ノ八	土屋右衛門允	既出
八五ノ一ノ九	青木善兵衛	景保の手付下役。画才あり。第六・七次測量参加。地図制作に協力八(以燕)天文学者。忠敬弟子(宜珍)天草測量時接待役。高浜村庄屋。のち親交を結ぶ
五ノ一ノ十	谷東平	既出
八五ノ一ノ十一	上田源太夫	既出
八五ノ二ノ一	下河辺林右衛門	既出
八五ノ二ノ二	"	
八五ノ二ノ三	足立重太郎	既出
八五ノ二ノ四	"	
八五ノ二ノ五	"	

八五ノ二ノ六	足立左内	既出
八五ノ二ノ七	足立重太郎	既出
八五ノ二ノ八	〃	〃
八五ノ二ノ九	坂本林平(吉賢)	既出
八五ノ二ノ十	久保木清淵	既出
八五ノ二ノ十一	坂部貞兵衛	既出
八五ノ二ノ十二	坂部八百次	仕。第九・十次測量参加
	永井甚左衛門	既出
	門谷清次郎	忠敬内弟子、のち景保門弟。同心
		組頭門谷八郎右衛門の子。第五・
		八・九次測量に参加。シーボルト
		事件判決、「江戸十里四方追放」
八五ノ二ノ十三	吉田勇太郎	(秀賢) 天文方。景保の上席。改
		暦御用を勤める
八五ノ三	窪木俊藏	久保木清淵長男
		伊能忠誨宛「送伊能君之東都序」
		一卷
八五ノ四ノ一	先触れ写	(金助) 御先手三宅助之丞組同心。
八五ノ四ノ二	〃	数学を会田安明に学び暦局出仕。
八五ノ四ノ三	〃	第五次測量に参加途中より帰府。
八五ノ四ノ四	〃	著書、「楳円通術」他
八五ノ四ノ五	市野茂喬	平戸藩主、松浦静山(カ)
八五ノ四ノ六	松浦肥前守	

八五ノ四ノ七	山本源助	福岡藩黒田家、家臣(カ)
	原佐太夫	
	上野小八	
八五ノ四ノ八	伊能忠敬	自筆下書き
八五ノ四ノ九	〃	
八五ノ四ノ十	〃	
八五ノ四ノ十一	〃	
八五ノ四ノ十二	高橋作左衛門	既出。願書(増人に付き)
八五ノ四ノ十三	伊能忠敬	暦学関係覚書き
計 二四九点		
[三] 記念館保管文書		
一、伊能忠敬関係歴史資料目録		
N二六	伊能三郎衛門書状	昭和六二年三月
N四六	伊能忠敬書状	伊能帯刀宛 1
二、佐原市古文書資料目録の内		
続伊能三郎右衛門家文書		
一八〇三	伊能みち書状	忠敬宛 9
〃	〃	
一八〇四	伊能忠敬書状断簡	養子盛右衛門宛 1
	ふさ書状	伊能みち宛 1
		計 十四点
		総計 五三〇点
(あんどろ ゆきこ 元国会図書館憲政資料室勤務)		

(世田谷伊能家文書より)

伊能忠敬のもう一つの家訓

渡辺 一郎

伊能忠敬の家訓として、これまで伝えられているのは、

第一仮にも偽りをせず孝弟忠信にして正直

たるべし

第二身の上は勿論身下の人にも教訓異見

あらは急度相用堅く守るべし

第三篤敬謙讓とて言語進退を寛容に諸事謙

り敬み少も人と争論など成すべからず

亥九月廿一日

である。寛政三年、事業を息子景敬に譲った
ときのものです。諸家の家訓と比較して実用的
な感じの強いものである。

ところが、最近、世田谷の伊能家の史料の
なかから、文化八年十一月、九州第二次測量
出発の直前に記した隠居財産の譲り状が見つ
かったので紹介する。

教訓および譲り金の分配表がついている。

一孝は仁義の根元に候、親の言ニ順、家事

を治、子孫長久を心がけ候儀第一二候、

兎角質素に行々諸商売を相休、貸金等も

地頭村貸は相止候様可被成候、此度妙薫・

おりて江申含置候間、我等と被心得、諸

事相談可有之候

一我等方より其許江年々預ケ置候金子、
猶極月ニ利足、妙薫・おりて江相渡
し、立会封金ニ可致置候尤確成質地
借付方も候ハバ、右兩人篤と承知之
上、貸付元利返済次第封金ニ可致候
一此迄本家江預ケ置候金八百兩之事、
兼而其許取添被成置候屋敷地面、御
配当被成候地所、猶又金高二十分相
当候様相改、兩人江承知為致、高帳
も御仕分置可被成候、則当家長久之
用意ニ候、余ハ兩人江申含置候
文化八末年十一月 伊能勘解由 印
伊能三郎右衛門

譲 金

このほかに別葉で譲り金の内訳がある。

一金五百兩	伊能三治郎
一金三百兩	同 鉄之助
一金五十兩	再金百兩 その余も 妙薫
一金三十兩	桜井 秀藏
一金三十兩	お古登
一金三十兩	神保氏
一金拾 兩	飯高吉太郎
一金三十兩	中村表
一金拾 兩	中村東
一金三十兩	久保木
一金五十兩	太郎右衛門
一金五十兩	大川治兵衛
一金拾五兩	牧野 観福寺
一金拾五兩	本宿組由緒百姓

右之通りニ候

文化八末十一月

伊能三郎右衛門

妙 薫

お利て

伊能勘解由 印

以上は「大切な書物」と表書きのある上包
に納められている。書いた時期は九州第二次
測量出発直前である。この譲り状を実行した
か、出発にあたり、年齢と前途の困難を思い、
万一を考え書き残したものは明らかではな
いが後者の公算が大きい。とすれば遺書を書
いて出発したことになる。

ここに云う譲金は隠居財産の分配である。
本家分は隠居の際、三郎右衛門に譲り済みな
ので、隠居してなお、忠敬はリッチだったこ
とになる。ちなみに、合計は千百兩となるが、
このお金があると、給料年二十兩の人間(同
心、代官手代クラス)を五五人雇うことがで
きる。この人達のランクの方は現代では年俸
五百万から一千万と考えられる。相对比较で
いうと、忠敬の隠居財産は現代の三億から五
億に相当したと考えている。(釈文は、馬場
八十松氏のご援助を頂いた)

伊能忠敬測量日記の連載について

編集部

伊能忠敬研究の基本史料の一つに測量日記がある。何故か未だに全巻活字となっていない。かなり以前から、各地で関係部分だけの、活字化がされたが、全編を通しての刊行は、まだ計画もない。

一九八八年に千葉県史料として、文化三年まで（第五次測量）の分が刊行されたが、そのあとは続いていない。刊行分は、分量的には全体の三分の一程度で、まだまだ膨大な未刊部分が残されている。

測量日記については、実は、元伊能忠敬記念館館長の佐久間達夫氏が、在動中に寸暇を惜しんで解読された全巻の活字本がある。当時ワープロは無かったので、タイプを自費で購入され、事務室に据え付けて、来客のお相手しながら、記念館の原本から一字づつ打ち込まれたものである。同氏は小学校の教職を勤め上げられたのち、記念館の館長になり、忠敬研究をライフワークとしておられる。

測量日記（佐久間本）は数部制作され、国会図書館、千葉県中央図書館等に寄贈されているが、私家本のため一般の方には目に触れにくい存在である。また、読み物ではないので、必要なときに参照できないと意味がない。

色々検討のうえ、佐久間氏にお願いして、千葉県史料に続く部分から、本誌の連載として、発表することとした。会員が増えて増頁がでないといつまでかかるか分らないという意見もあるが、今まで無かったのだから、始めることに意義があると考え。地名、その他行き届かないことがあるかも知れないが、とにかく第一歩を踏み出すことが我々のねがいである。

佐久間氏にも快諾して頂いたので、会員諸氏とともに忠敬の足跡を

辿りたいとおもう。なお、全編を希望される方が多いようであれば、別途検討させていただきます。ご連絡下さい。

測量日記を現代の地図の上から追ってみる

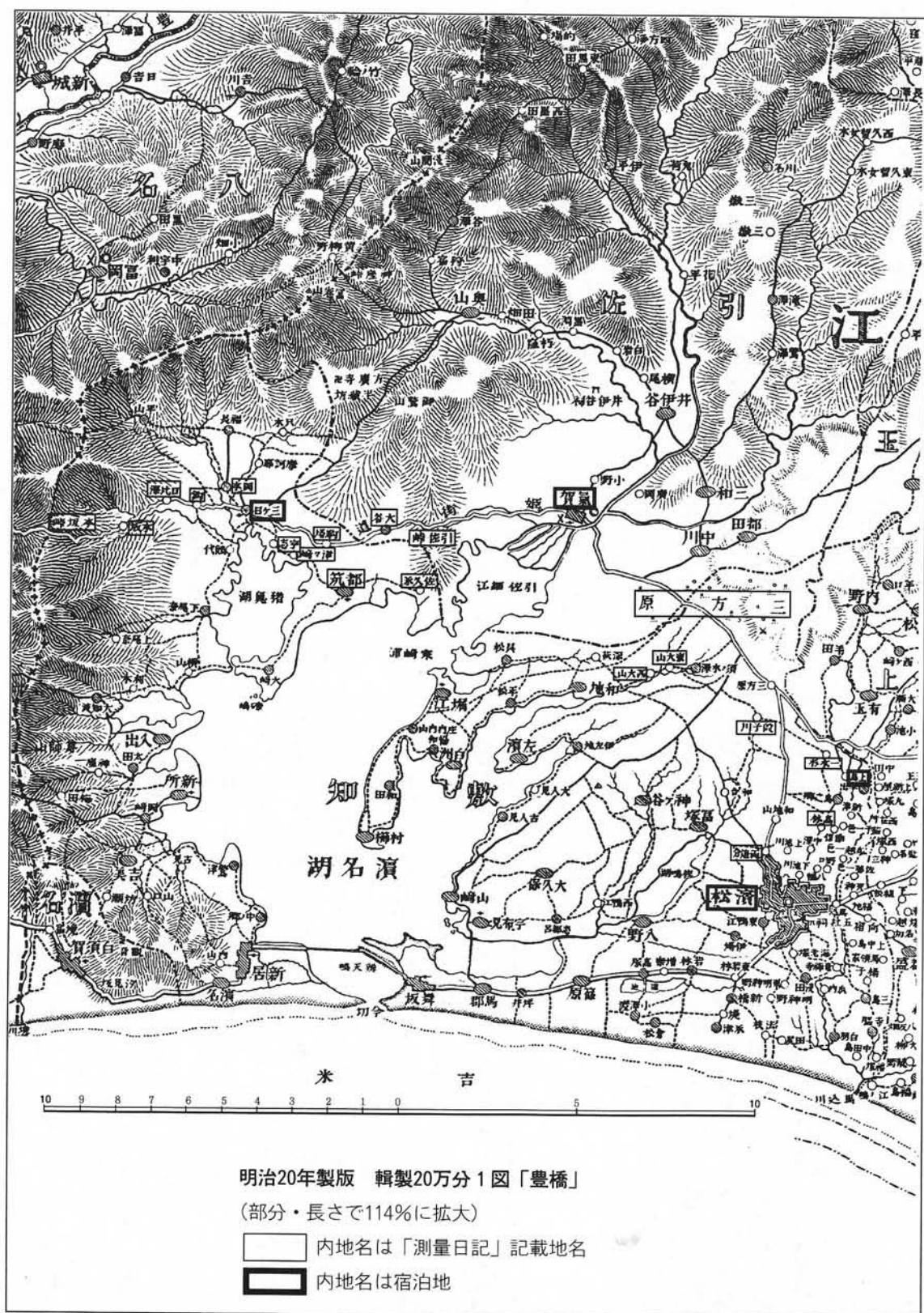
清水 靖夫

伊能測量隊が幕命で測量した地図（以下伊能図と略称）には、測線が赤で記入されている。また、伊能忠敬の一日の測量行動については、大谷亮吉、保柳睦美両氏はじめ多くの先学が報告を書いている。これらに負いながら、どの範囲をどの位の日数で動いていたか、近代の地図の上で眺めたいと思い、測量日記に記載されている地名を、地図上で拾い出してみた。もっとも、現代の地図ではあまりにも変貌が著しいため、一応伊能図を使って作製されたと言われている（実際には、当時すでに測量が開始されていた迅速測図類や、内務省地理局、海軍水路部のデータを使い、それらの無い部分や接合に伊能図が用いられたようである。当時、伊能図が正確な地図の代名詞になっており、それを利用していた節がある。なお地名等は天保期の国絵図が利用されている）明治十七〜二〇年代の参謀本部測量局の「輯製二〇万分一図」の上でおさえてみた。

利用した測量日記は「第六次測量（文化五年一月二五日〜）四国沿岸、大和路」の途次、浜松からの姫街道の部分である。

「輯製二〇万分一図」は明治二〇年製版「豊橋」を拡大使用した。測量日記に記載されている村名（集落名）全てが地図上に記載されているわけではないが、地図上で枠で囲んだ地名が測量日記に記載のものであり、宿泊地は太い枠で囲んだ。（次頁参照）

（しみず やすお 立教高校教諭）



伊能忠敬測量日記解題

渡辺 孝雄

一、はじめに

伊能忠敬の著した測量日記は、二種類残されている（佐原市伊能忠敬記念館蔵）。忠敬が測量しながら書いたものと、忠敬が後に清書したものの二種類である。前者は現在「忠敬先生日記」の表題がつけられており、五十一冊ある。この表題は昭和二十七年につけられたものでそれ以前には、題がなかったらしい。大谷亮吉編著『伊能忠敬』（大正6）では、この日記について原著と表現している。後者は現在「測量日記」の表題がつけられており、二十八冊ある。この「測量日記」の表題は、昭和二十七年二月に、装丁を修理した時につけられたもので、この二八冊の測量日記にはもともと「蝦夷于役志」「乙丑丙寅 沿海日記」などと、それぞれに原題がつけられていた。ただこの原題を忠敬自身がつけたのかどうかは定かではない。この原題の文字が忠敬の自筆かどうか疑問が残るからである。

この二種類の日記の違いについて、かつて「二つの測量日記について」（『伊能忠敬測量日記 一 千葉県史料 近世編』の巻末の解決、昭和三年）と題して簡単に触れたことがある。享和三年の第四次測量（東海道・北陸沿岸・佐渡測量）までは、二つの日記の間には、記述にかなりの違いがみられる。通過した村々の村高・家数・人数・支配などが、「忠敬先生日記」の方では詳しく記述されているのに対して、「測量日記」の方では、この点については簡略化されているのである。文化二・三年にかけての第五次測量（紀州・山陽路・瀬戸内海・山陰地方沿岸測量）以降では、二つの日記の記述にあまり差異はみられなくなる。文化元年九月に忠敬は御家人として幕府に登用され、この第

五次測量から測量事業は幕府の事業としてすすめられることになった。このため村々についての記録は別帳に記されるようになったがと思われる。

これまで、この二種類の日記については余り紹介されていないので、二種類の測量日記の記述内容を紹介する。

二、「測量日記」（二八冊）の記載内容

忠敬が測量後に清書した、「測量日記」二八冊の各冊の原題と、記述内容（日記記述年月日）は、表1の通りである。忠敬は全部で十回の測量を行ったが、第九次までの測量記録がこの「測量日記」に収録されている。

「測量日記」の表題は、昭和二十六年に新しくつけられたものである。「測量日記之内 一」は寛政十三年「測量日記之内 三」は寛政十二年の記録でありこの部分は年代順にはなっていない。なおこの「測量日記」二八冊は日本学士院（東京上野公園内）図書室に模写本が所蔵されている。

三、「忠敬先生日記」（五一冊）の記載内容

忠敬が測量中に記述した、「忠敬先生日記」五一冊の記述内容（日記記述年月日）は、表2の通りである。忠敬の十回の測量の内、第八次測量までの記録が収録されている。第九次測量（伊豆諸島）に、忠敬自身が参加しなかった為、この日記はない。しかし一部の江戸日記（文化四年・文化六年・文化十二年・十三年・十四年）が、「忠敬先生日記」のなかに含まれている。

五十一冊のなかで、「忠敬先生 三十四」と「忠敬先生 四十一」の表題が間違っつけられている。この表題は昭和二十七年につけられ

〔表1〕 測量日記 (28冊) の原題と日記内容

表 題	原 題	日記記載年月日等	備 考
測量日記之内 一	蝦夷子役志 啓行策略 完	蝦夷御用集録	
測量日記之内 二※	沿海日記 啓行策略 全	寛政13. 1. 5. -3. 7.	
測量日記之内 三※	寛政十二庚申 蝦夷子役志	寛政12. 閏4. 19-10. 28.	第1次(蝦夷地探検)
測量日記 四	享和元年辛酉歳 沿海日記 完	享和1. 4. 2. -12. 7.	第2次(蝦夷地探検)
測量日記 五	享和二壬戌歳 沿海日記	享和2. 6. 11. -10. 23.	第3次(蝦夷地探検)
測量日記 六七	享和三癸亥歳 沿海日記 上下	享和3. 2. 25. -7. 4. 享和3. 7. 5. -10. 7.	第4次(東海道・北陸・佐渡)
測量日記 八九 測量日記 十 測量日記 十一	乙丑丙寅 沿海日記 元亨 乙丑丙寅 沿海日記 利貞 乙丑丙寅 沿海日記 貞	文化2. 2. 25. -8. 12. 文化2. 8. 13. -文化3. 2. 3. 文化3. 2. 4. -6. 6. 文化3. 6. 7. -11. 20.	第5次(紀州・山陽・瀬戸内山陰)
測量日記 十二 測量日記 十三	戊辰 沿海日記 上下	文化5. 1. 25. -8. 1. 文化5. 8. 2. -文化6. 1. 19.	第6次(四国・大和)
測量日記 十四 測量日記 十五 測量日記 十六 測量日記 十七	測量日記 一 測量日記 二 測量日記 三 測量日記 四	文化6. 8. 27. -12. 29. 文化7. 1. 1. -4. 28. 文化7. 4. 29. -12. 30. 文化8. 1. 1. -5. 8.	第7次(九州一次・豊後・日向・薩摩・天草・肥後)
測量日記 十八 測量日記 十九 測量日記 二十 測量日記 二十一 測量日記 二十二 測量日記 二十三 測量日記 二十四 測量日記 二十五 測量日記 二十六	辛未壬申 測量日記 壬申 測量日記 壬申 測量日記 癸酉 測量日記 癸酉 測量日記 癸酉 測量日記 癸酉 測量日記 甲戌 測量日記 甲戌 測量日記	文化8. 11. 25. -文化9. 7. 21 文化9. 7. 22. -10. 13. 文化9. 10. 10. -12. 29. 文化10. 1. 1. -4. 13. 文化10. 4. 14. -7. 3. 文化10. 7. 4. -11. 7. 文化10. 11. 8. -12. 30. 文化11. 1. 1. -2. 28. 文化11. 2. 29. -5. 23.	第8次(九州二次・九州縦断・屋久島・種子島・九州西岸・壱岐・対馬・五島・中国内陸部・飛騨・松本)
測量日記 二十七 測量日記 二十八	乙亥丙子 測量日記 天地 乙亥丙子 測量日記 地	文化12. 4. 27. -12. 30. 文化13. 1. 1. -4. 12.	第9次(伊豆諸島)

(佐原市伊能忠敬記念館蔵)

※「測量日記之内 二」と「測量日記之内 三」は、昭和27年に装丁をしておし、新しく表題をつけた時に順序を間違えたらしい。年代順にみると「測量日記之内 三」の方が先になる。

注1) 28冊のうち、1-26までは忠敬筆であるが、「測量日記 二十七」「測量日記 二十八」の2冊は異筆である。この第9次の測量に忠敬は参加しなかったためである。

たものであるが、両冊ともに書き出しは四月二三日から始まるために「忠敬先生 三四」(文化十・四・二三)と「忠敬先生 四一」(文化九・四・二三)を、整理者が順番を間違えたらしい。現在「忠敬先生

四十一」とあるのが、「忠敬先生 三四」となり、「忠敬先生 四一」となるのが正しい順序である。

(わたなべ たかお 千葉県立岬高校教諭)

〔表2〕
「忠敬先生日記」(51冊)の日記内容

日記番号	日記内容	備考
一	寛政12. 閏4. 19-10. 22.	第1次測量
二	酉(享和元)地名覚・触書	
三四	享和1. 4. 2. -7. 15. 享和1. 7. 16. -12. 7.	第2次測量
五	戌(享和2)御用触書等	先触集
六七	享和2. 6. 11. -8. 19. 享和2. 8. 20. -10. 24.	第3次測量
八	御用触書(享和3. 2. 12. -3. 26.)	先触集
九	御用触書(享和3. 3. 27. -10. 4.)	先触集
十 十一 十二	享和3. 2. 25.-4. 17. 享和3. 4. 18-7. 24. 享和3. 7. 5. -10. 12.	第4次測量
十三 十四 十五 十六 十七 十八	文化2. 2. 25. -6. 22. 文化2. 6. 23. -9. 23. 文化2. 9. 24. -文化3. 2. 13. 文化3. 2. 14. -4. 30. 文化3. 5. 1. -8. 19. 文化3. 8. 20. -11. 20.	第5次測量
十九	文化3. 11. 21. - 文化5. 1. 24.	江戸日記.
二十一 二十二 二十三 二十四	文化5. 1. 25. -5. 25. 文化5. 5. 26. -7. 25. 文化5. 7. 26. -9. 29. 文化5. 10. 1. -文化6. 1. 3. 文化5. 12. 28. - 文化6. 8. 26.	第6次測量 と江戸日記
二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四※1) 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一※2) 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十	文化6. 8. 27. -11. 11. 文化6. 11. 12. - 文化7. 1. 26. 文化7. 1. 27. -4. 12. 文化7. 4. 13. -8. 8. 文化7. 8. 9. -11. 29. 文化7. 12. 1. -文化8. 閏2. 11. 文化8. 閏2. 12. -4. 20. 文化8. 4. 21. -11. 25. 文化8. 11. 26. - 文化9. 4. 22. 文化10. 4. 23. -6. 4. 文化9. 7. 30. -9. 7. 文化9. 9. 7. -10. 12. 文化9. 10. 13. -12. 10. 文化9. 12. 11. - 文化10. 1. 28. 文化10. 1. 16. -3. 18. 文化10. 3. 19. - 文化10. 4. 22. 文化9. 4. 23. -文化9. 7. 29. 文化10. 6. 4. -8. 6. 文化10. 8. 1. -9. 25. 文化10. 9. 19. -11. 26. 文化10. 11. 27. -12. 3. 文化10. 閏11. 9. -文化11. 1. 13. 文化11. 1. 14. -2. 5. 文化11. 2. 6. -3. 20. 文化11. 3. 21. -5. 1. 文化11. 5. 2. -12. 30.	第7次測量 (11. 25. 以後8次測量) 第8次測量
五十一	文化12. 1. 1. -文化14. 12. 29.	江戸日記※3)

(佐原市伊能忠敬記念館蔵)

※1・2 「忠敬先生日記 三十四」と「忠敬先生日記 四十一」は、昭和二十七年に表題をつけた際に順番を間違えている。「忠敬先生日記 三十四」は文化十年の記録である。「忠敬先生日記 四十一」は文化九年の記録である。

※3 文化十二年二月三日(十九日)までに江戸府内測量の記録がある。また文化十二年閏八月八日(十月三日)までの江戸府内測量(第十次測量)については、「測量道順別記有之故略之」とあり、

注一 記録していない。
伊豆諸島測量記録(第九次測量、文化十二・四・二七)文化十三・四・十二は忠敬本人が測量に参加しなかったために、「忠敬先生日記」はない。

注二 五一冊の内、四九冊までは忠敬の自筆である(ただし測量を手分けした分については、その隊の責任者の筆になる)。第五一冊・五二冊は異筆である。

◆連載 第六次測量日記 (一)

佐久間 達夫

文化五年 四国・大和路測量に向かう。品川出立から、大阪を経て尼崎まで。

二、第六次測量日記

文化五戊辰年、正月二十五日、四国、並 大和路測量の命を蒙りて、伊能助解由、達添坂部貞兵衛、柴山伝左衛門、下河辺政五郎、青木勝治郎、並 内弟子 稲生秀藏、植田文助、久保木佐右衛門、供侍 神保庄作、神取 佐助、善八、草履取 藤吉、上下合十六人出立す。吉例なれば、六ツ半後、秀藏、佐右衛門、文助、庄作、佐助、善八、藤吉を連て八幡宮へ参詣し直に出立す。

送別の人は、伊能三郎右衛門、同平右衛門、久保木太郎右衛門、大川治兵衛、尾形顯治なり。品川へ四ツ後に着。外に大野弥三郎、遠鏡持参して此所へ出て送る。途中より雨。坂部、柴山、下河辺、青木は品川宿へ四ツ前に着。休 中食宿 湊屋弥三郎。それより雨降出し神奈川宿(品川より川崎へ二里半。川崎より当宿へ二里半)六ツ頃に着。雨止て風。止宿 大塚屋留右衛門。

同二十六日 朝六ツ後、神奈川宿出立。曇天微雪あり。戸塚宿にて中食す。宿 葉府屋与五右衛門。(神奈川より保土ヶ谷 一里九丁。保土ヶ谷より戸塚へ二里九丁)四ツ前より晴天に成。八ツ頃に藤沢宿へ着。(戸塚より一里三十町)止宿 吉田屋仁兵衛。此夜曇。五ツ後晴る。

同二十七日 朝六ツ後 藤沢宿出立。晴天。大磯

宿中食 本陣 小嶋才三郎。(藤沢より平塚へ三里半。平塚より大磯へ二十七町)八ツ半後小田原城下着。(大磯より四里)止宿 本陣 清水彦十郎。

同二十八日 晴天。朝六ツ後、小田原城下出立。箱根宿中食。本陣 白井屋三郎右衛門。(小田原より四里八町)谷田村 水野出羽守領。名主伝左衛門。同村 本多大学知行所 名主文右衛門。川原谷村 大久保出羽守領 名主嘉左衛門。地先案内に出る。七ツ半後 三嶋宿へ着。(箱根より三里二十八町)止宿 本陣世古六太夫。

同二十九日 晴天。朝六ツ後 三嶋宿出立。沼津城下に至る。(三島より一里半)地境より水野出羽守郡代手代 岩下佐十郎、町方小嶋 杉浦兵吉案内。領分界迄 同心案内。九ツ後吉原宿へ着。(沼津より原へ一里半。原より吉原へ三里)止宿四目屋 平左衛門。原宿にて中食。本陣 高田平左衛門。此所にて浜松城下より氣賀街道を御油宿迄測量の先始を出す。此夜より我等持病の寝発。

二月朔日 晚七ツ後より雨。六ツ頃吉原宿出立。由比宿にて中食。羽根野盛伴右衛門。(吉原より蒲原へ二里三十町。蒲原より由比へ一里)八ツ頃 江尻宿へ着。(由比より興津へ二里十二丁。興津より江尻へ一里)止宿 府中屋茂兵衛(去 丑年の止宿なり)。予持病寝にて病氣。此夜雨。

同日 晴天。朝六ツ頃 江尻宿出立。丸子宿中食。宿 米屋市郎右衛門。(江尻宿より府中へ二里二十三町。府中より丸子へ一里半)八ツ後 藤沢宿着(丸子より岡部へ二里。岡部より藤沢へ一里二十六町)止宿 本陣 青嶋治右衛門。予病氣。

同三日 晴天。朝六ツ頃 藤沢宿出立。日坂宿中食(鳥井権右衛門 本陣にあらず。藤沢より嶋田へ二里六町。嶋田より金谷へ一里。金谷より日坂一里二十九丁)八ツ後 掛川城下着。(日坂より掛川へ)止宿 本陣 沢野弥惣左衛門。此日 大井川浅し。六十六文渡し。予病氣。

同四日 晴天大風。朝六ツ後 掛川宿出立。見付宿中食。脇本陣 大三河屋新左衛門。(掛川より袋井へ一里半。袋井より見付へ一里半)八ツ半頃 浜松城下着(見付より四里半)。止宿 本陣 杉浦惣兵衛。此日 浜松城下へ氣賀駅 三日駅役人出る。又 浜松鎮役人惣代も出る。此夜風強く不測量。予病氣。同五日 晴天。同所逗留。測量の諸器を仕立。此夜晴天測量。

同六日 晴天。朝六ツ後 浜松城下出立。同所大手脇制札取より初。(四ツ後より曇り 烈少降。又雨。測人は坂部、下河辺、柴山、青木、稻生、並に文助。神取 佐助、善八。浜松町内連尺町、紺屋町、高町名残の組屋敷。追分村、高林村、馬生村、段子川村、一本杉村、上福村(追分村迄人家あり。余は往來に人家なし)。此日浜松より二里斗測。三方ヶ原にて留印杭を残し、三十町斗も入込て上福村止宿。曹洞宗延命寺。止宿懸し。(三方ヶ原より安間街道を上福村の前迄行長上郡下村一村あり。此街道は浜名湖今切と成し時

の街道也という。道幅大に広し。

同七日 朝晴天。六ッ後 上嶋村出立。昨日、三方

ヶ原の留杭(即 追分)より初め、両大山村(西大山村、東大山村)あり。総て両大山という。前山村、祝田村、氣賀ノ内老ヶ谷刑部村、それより氣賀ノ上村を歴て氣賀町迄測て止宿。中村与太夫。此夜晴天測量。当近藤縫殿助陣屋代官遠藤房治兵衛、斎藤庄太夫出る。途中へ近藤常吉家士中井猪左衛門、兵衛市右衛門出る。

同八日 朝より雨。逗留。地図を成。夜亦雨。

同九日 朝曇天。逗留。五ッ後晴る。仍て引佐峠迄打進、氣賀町止宿前より初、氣賀具石村、同殿本村、小森村、下村、又殿本枝郷岩根を歴て引佐峠迄測。(即 氣賀地内)、八ッ半後に帰宿。予は病氣。秀藏は地図を成。仍 氣賀は地名にて老ヶ谷上村、具石殿本、小森下村は往來付村なり。小森一村は地先而已にて山根に住居。伊目、油田二村は海辺付なり。下村は海辺街道両方にあり。

同十日 晴曇天。六ッ半晴る。氣賀町出立。引佐

峠より測初、大谷村(宅迄引佐郡、此より敷知郡佐久米村、都筑村、駒場村(両村地先入会)、津々崎村宇志村を過て三ヶ日駅に至る。近藤豊太郎家來名倉安右衛門引佐峠へ出る。八ッ半頃 三ヶ日駅(又村とも)着。止宿 三河屋喜右衛門。(本陣小池八左衛門焼失 亭主役) 予病氣。

同十一日 朝より大風曇天。逗留。微雪あり。

昏に風止。夜晴天測量。

同十二日 晴曇。朝六ッ半頃 三ヶ日駅出立。予病氣全快。同村より電初、岡本村、釣村、日比沢村、同

枝郷花藏寺村、本坂村、中倉庄屋平左衛門。家作吉、

本坂峠を越、即遠州引佐郡、三州八名郡界なり。峠を下りて嶺山村迄測止宿。庄屋夏目藤左衛門。花藏寺村へ近藤豊太郎家士高橋丹治出る。峠迄浜松郡方同心案内、嶺山村は松平伊豆守領にて郡方下役内藤庄藏出る。大岡越前守家士吉野平右衛門見舞に來る。此夜晴天測。

同十三日 晴天風。朝六ッ半頃 三州八名郡嶺山村出立。同村より測初、月ヶ谷村、長安村、和田村、それより宝飯郡当古村(和田村、当古村間 豊川あり)、雨谷村、三橋村、牧野村、馬場村、鍛冶村、豊川村、(大岡越前守領巨勢日向守知行) 大岡家士吉野平右衛門 村界へ出る。古宿村を歴て北金屋村迄測。止宿 濱家宗 久勢山金寺。古寺にて見吉し。豊川村に稲荷の社あり。因々より參詣群衆のよし。古宿村入口より三四町斗なれば立寄て一見しめ。稲荷の寺は禅宗にて妙嚴寺という。御朱印四十五石ありという。此夜晴天測量。

同十四日 朝より晴天。六ッ半頃 北金屋村出立。同村より初、牛久保村の地先へ米津小太夫家士某出る。市田村、野口村、八幡村中食。此所八幡宮 御朱印百五十石。白鳥村、久保村、国府村を歴て御油宿四ッ頃着。止宿 本陣 鈴木善十郎。(当國 八名郡神郷村に右巻山あり。又、宝敷郡長山村に本宮山砥鹿神社あり) 迄測る。

同十五日 朝晴曇。六ッ後 御油宿出立。十六町にて赤坂宿に至る。それより長沢村(松平源七郎いふあり)、元宿村(此村には 法藏寺あり)、榎木村

藤川宿(赤坂より二里九丁) 岡村枝郷神馬崎 生田村(小豆坂生田ヶ原あり)、東大平村(大平川橋あり)、西大平村(大岡越前守陣屋あり)、右陣屋より同心先払に出る。四ッ後岡崎城下着。(藤川より一里半) 止宿 本陣 中根甚太郎。

同十六日 朝より晴天。六ッ前 岡崎城下出立。矢作橋(式百八間という。実は百八十間余)を渡り矢作村(東矢作村、西矢作村あり。東矢作村は立場なり)。宇頭村、尾崎村、宇頭茶屋、大浜茶屋あり。(宇頭茶屋は家数も多く 能家あれど、大浜茶屋の儀は、古來大浜村より此所へ出たる初ゆえ、諸人両方を大浜茶屋という)。里村の出郷に野地と小家あり。今村(前は刈屋領なりしに、二十年程前より福嶋領に成)、里村も同断。牛田村、池鯉鮒宿(崎崎より三里三十町)、刈谷領にて先払出る。今岡村、東岡村、五軒屋新田(又前後ともいう) 立湯、落合村、鳴海宿(池鯉鮒より二里三十町)、笠寺村(立場)、山崎村を歴て八ッ頃熱田宿に着。(池鯉鮒鳴海の間に、西本願寺門跡に行逢) 尾州御使者熱田方吟味方浅野又四郎罷出可申所同駅役人を以 内談例の通に御使者 並に請相済す。(鳴海より宮へ一里半) 止宿 伊勢屋伝左衛門。名護屋城下町役人吉田伴蔵、山本九八郎、伊東九郎助止宿へ來る。小牧街道の測費を相談す。尤、前に熱田宿へ龍越候様に申道、身に佐屋宿加藤五左衛門方へ佐屋宿より、小牧街道相談致度儀有之候間、桑名宿へ罷出くれ候様 触書状を遣す。

同十七日 朝より晴天。六ッ半頃 熱田宿より乗船。(海上七里という)。四ッ後 桑名城下へ着。

中食 鳩鶴屋作左衛門。佐屋宿 加勢五左衛門來待
小牧街道の邊を談す。それより安水村(立場) 梶生
村の間に町屋川あり。小向村(立場)、柿村(羽明川
あり)、松寺村、富田村(立場)、焼給の名物、茂福村、
八幡村、羽津村、末永村(山中忠左衛門宅へ立寄。
此者 寅の冬 桑名にて面会、測器を頼、其後富田
才兵衛を以文通あり。猶又測器を頼に付、弥三郎へ
申付測器出来 才兵衛へ渡遣す。右、山中忠左衛門
浜松城下迄出迎、氣質街道御油宿迄の測量の隨身し
て、日夜測量術を学び御油にて別る。我等通行を待つ、
四日市宿入口に ミクチ川あり。セツ後に四日市宿へ
着。(桑名より三里八町) 止宿 本陣 清水太兵衛。
同十八日 朝より晴天。六ツ半頃 四日市宿出立。

赤堀村、日永村、泊村、追分(日永村の内なり。即
東海道とまた伊勢向宮の追分也。先に又泊村地先あり)
采女村(枝突坂あり)、大久保村を過、石薬師宿(四日
市宿より二里二十七町)、上野村、高宮村を経て庄野宿
に至て中食。本陣 伊勢屋兵左衛門。(石薬師より庄
野へ二十七町)、それより汲河原村、西富田村(泉川あ
り)、和泉村、海邊寺村(立場)、河井村、和田村(立場)、
龜山城下(庄野より二里。龜山領先出る)野尻村字
能古(立場)、落針村、関宿入口に小野村あり。八ツ前
関宿へ着。龜山より関へ一里半。止宿 本陣 川北久
左衛門。此夜晴天測量。

同十九日 曇晴風。六ツ半頃 関宿出立。市之瀬村
(同村の内 藤ノ棚 立場 同村の内 井才天。沓掛
村の内ならの木というあり。沓掛村(同村の内 焼
地蔵)、坂下宿(関宿より一里半)、鈴鹿峠(立場 坂

本宿持。此所 伊勢屋鈴鹿部 近江国甲賀郡の界な
り。山中村(同村の内 字 沢)、猪ノ鼻村(立場な
り)、蟹河坂村を経て土山宿。休 本陣 忠左衛門。
(坂下より二里半) 松尾川を渡、松尾村、髪宮村、
前野村(此村に賀壁派の陣 地安寺という寺あり。
下馬札あり。市場村(右 大野村・立場也。左 徳
原村、今宿村、今在家村、小里村、新城村(栗林と
いうなり。家三三軒見える)を過て、八ツ後に水口
城下着。(土山より二里半十一町) 止宿 天葵明朝
当宿小休に付 二軒宿に成。丸磨金谷宿門。万屋伝
兵衛なり) 着後 当加藤能登守徒士目付 黒出茂馬
用配として出る。此日 終日風。此夜 石部宿より
天葵方明朝早立に付 我等出立を遅く致候様申来る。
同二十日 晴曇。朝六ツ半頃 水口城下出立。林
口村。北畠村、泉村(屋かた川あり)、三雲村(字田
川 立場)、吉永村(弘法の二本杉というあり。今は一
本なり)、夏見村(立場)、針村、平松村、柑子袋村を過
て石部宿(水口より三里十二町) 至る。休 小嶋金左
衛門。本陣なり。伊勢落村、林村、六地藏村(字極ノ
木、立場)、小野村、手原村、上釣村(小川あり)、川辺
村、坊袋村、目川村(茶食名物)、岡村(立場 此所に
も茶飯 田楽あり。家作もよく賑)、小柿村新屋敷(本
村は右方七八町にあり)、大路井村新屋敷(本村は、中
山道にあり。草津より東の街道に有)を経て八ツ頃に
草津宿に着。(石部より二里半七町) 止宿 本陣田中
九藏。此日天葵方院使に途中にて逢、道の側に避、小
野村まで随所領大庄屋片岡源十郎迎に出る。着後 隨
所部奉行羽太幸藏見舞に出る。昨夜天葵二頭広徳納

言、千種大納言石部泊。院使は梅小路前大納言、草津
宿泊なり。

同二十一日 未明小雨 六ツ前止。草津宿出立。矢
倉村(是より矢橋へ追分あり)、野路村(玉川の古跡有、

南笠村、大萱村の地先あり。新田村(元来、大萱村
の枝郷なれ共 今は一村となる)、大萱村(字 月の
輪 立場)、大江村 神領村(去丑の測量に残杭せし
所也)、勢田橋本村、勢田大橋、小橋を渡り、勢田鳥
居川村(立場)、石山寺へ立寄。別保村の地先あり。
宮町(別保村枝郷、中之庄村 隨所(即 城下) 西
之庄村(隨所惣門、馬場村、松本村(打出の浜の名
所)を過て大津宿へ着。(草津より三里半六町) 休
万屋久兵衛。(去寅の止宿) 坂部、下河辺は、草津
宿より別て矢橋へ回り、乗船して大津宿へ先に着。
それより一同に追分院茶屋町へ四ツ後着。止宿 有
川喜右衛門。(此院茶屋町は、山科の郷にて、蔡裏
御料 小堀中務支配、小堀中務手代中原文治、大津
宿休へ出て猶此所にて支配所村々測量を相談す。院
茶屋町着後、柴山、青木、文助、庄作、佐助、善八
等を京都一見に遣す。此日片岡源十郎、矢橋茂平治
大津宿迄送別。伏見惣代辰木久平、同所組頭坪井又
三郎、同所問屋高井四郎兵衛來る。院茶屋町は山城國
宇治郡也。

同二十二日 朝より晴天。六ツ半前 山科郷追分院
茶屋町出立。止宿より辰二十間斗にて去丑年の追分印
より溯初。四宮村、小山村、音羽村(音羽川あり。水
なし 河原也)、大塚村、行燈町(大塚村枝郷)、大宅村
(是迄蔡裏御領山科郷)、小堀中務支配 即手代中原文

治案内。藝真御領（小堀中務支配城州宇治郡山科郷村々。北小栗郷村、北北山村、上花山村、野子奥村、御殿村、白岡村、四宮村、小山村、大宅村、柳辻村、川田村、行灯町上野村、竹ヶ鼻村、音羽村、大塚村、西野村、西野山村、栗栖野新田、南小栗郷村、八軒町、尾奈郷町、桃灯町、以上二十三ヶ所（何郡不同）、小野村（唯心院御門跡領、なうじに、誤）
鶴山上下寺領入会也、唯心院御門跡家士岡本大炊次上下鎗にて同村入口へ出て挨拶。此村に六地藏と大亀谷の追分あり。勸修寺村（勸修寺 宮領 三寶院御門跡領 醍醐無量壽院領入会。右村入口より勸修寺宮の家士中村六郎 村界迄付添（此村 立場 大黒屋宇兵衛にて中食）、同村堺より同国紀伊郡深草に成る。
山を御草山という。（山守 深草村 長谷川太兵衛）左右山なり。大亀谷という。勸修寺村界より大亀谷の内 谷口街道筋 東西五百九十九間 伏見支配左石垣草山は長谷川太兵衛預りのよし。それより大亀谷組十三町の内谷口町、久宝寺町、大谷町（立場椿茶屋）にて小休、京師見える。北寺町、中寺町、南寺町、升屋町、鳥居崎町（大亀谷町は家数 間敷に拘わらず五軒にても 三軒にても何町というなり）。藤森社（神体弓兵政所 崇道天皇。御朱印二百石 神主藤森老岐）に至る。大亀谷組（谷口町、大谷町、久宝寺町、北寺町、中寺町、升屋町、千本町、風呂屋町、南寺町、鳥居崎町、坂口町、越前町、町町目合十三町）それより伏見往來京通、北新町、京通南新町（内北側四十一間二尺、源草村地先入込）、七軒町（墨芝、墨染横町、墨染組升屋町、南北細屋町、（惣美須町あり）、堀上町、両番町十五町目、同十四町目、両番町十三町目、同十二町目、同十一町目、石屋

町、指物町、右側に尾州屋敷あり。板橋二町目、鷹匠町、上南郡町、下南郡町、伯耆町、中油掛町、下油掛町、京橋町（船場あり）、表町、東浜町、三柄向町、三笠三町目、向凸町目、同五町目（以上 伏見市中 東海道往來也）、御香宮（神体 神功皇后 神主二本佐波 御朱印 三白石 参詣。樓門は水府侯、華表は紀州侯の寄進なり。（長三丈斗 周八尺余 紀州より船積するよし）、本宮は東照宮の御造営なりと町役人いう。伏見町役人 伏見境より人足を連れ案内止宿に至る。伏見南浜町丹波屋仁兵衛（去丑年も止宿せし也）、此春大坂町奉行用人 並 間清市郎へ書状を出す。当所本陣 木津屋与左衛門。北國屋利右衛門、大塚小右衛門、富田屋三左衛門上下にて出る。間屋平左衛門 四郎兵衛も出る。

同二十三日 晴天。朝六ツ半頃 伏見出立。（横大路村 富森村を過ぎ右に見る。街道堤原前にて水入沼に成。其余兩村田地）淀城下（納所町、水垂町、大下津町は小橋手前にて紀伊郡なり。）、小橋を渡り池上町、下津町、新町は久世郡なり。孫橋、大橋を渡れば（大橋は木津川の流 大橋迄は淀分也）、雄山八幡神領 美豆村（即 人家あり）、堤を余程行はば樽本町より八九町前、左の方に科手町見える。それより樽本町（美豆村科手町 樽本町神領なり。即 山城国綴喜郡なり。）、なり。雄山八幡宮へ不残参詣す。予一人残。それより河内国交野郡楠葉村（立場なり。船あり。川あり。水なし河原なり。）、上嶋村（宇山村 渡父村地先斗り街道へ出 人家は八九町渡り、下嶋村（穂立川あり。水なし川原也）、坂村、小倉村、渚村（是迄交野郡なり）、磯嶋村（此村摂州島上郡淀川向より飛地なるべし）、又河州交野郡藝野村（天の川という

あり。）、川を渡れば牧方駅（元 岡新町村 岡村 三ッ矢村 泥町村 合四ヶ村にて牧方駅という。河内国茨田郡也）三ッ矢村分にて中食（丸屋宗五郎）それより伊加賀村（往來より左八九町）、出口村（同断 六七町）、同村（字 松ヶ鼻 人家往來にあり。）、木屋村、太閤村（野村、仁和寺村、一番村（中程左の方に佐田天神社あり）、永井出羽守足繼先弘。二番村、五番村、四番村、三番村、六番村、七番村、八番村（去寅五月淀川堤切て、八番 九番 北十番 下嶋 南十番 砂押、九番村（五年差出書付になし）、北十番村、下嶋村、南十番等 去寅大水に砂押に成。其余も少宛は砂押。七番淀川堤 長三百九間、八番九番北十番、下嶋、南十番、五ヶ村合て堤長六百八十間、守口分堤長六百九十間、一番より十番等は、大庭ノ庄という。又 守口駅より東に半里許にて一番村より四番村迄あり。門真の庄というよし。守口駅役人いう。八ッ頃守口宿へ着。止宿 本陣 吉田八兵衛。

同二十四日 晴天。朝六ツ半後 守口宿出立。土居村（守口宿外）是迄茨田郡なり。是より河内国東成郡上辻村（街道に家四五軒あり、本村は離る。馬場村（地先斗、人家はなし）、貝脇村（同前）、今市村（家四十軒斗）、森小路村（右村内に別所村飛地ありて家一軒あり、別所本村三丁斗左）、又右側森小路村分、左は貝脇村（家四十軒斗）、南嶋村（地先斗、人家は右方八九丁にあり）、関目村（人家あり、長形に街道に突出、立場）又、南嶋村の地先斗にあり。中村も同断。又、関目村（此先斗 道の左、内代村（道際 右の方 家十二軒 はなれし家共に二十八軒）、野江村（道より左の方一二丁田地を渡りて人家あり。往來際に十軒斗）、善源寺村（地先斗也。家は右十町斗）、沢上江村（同上）、中野村（地先少出）。

野田村(道の右に見苦敷 人家あり、野田町(守口
案内 日片町、野田橋、京橋を過、朝五ツ後大坂呉
服町へ着。守口駅役人 右町迄送る。間清市郎、呉
服町会所に待居。直に中食して東奉行所 平賀信濃
守月番へ出て、又、西奉行所佐久間備後守へ、我等、
坂部、下河辺、柴山同道にて出る。止宿は呉服町二
軒に成。(一軒は会所 預人 平兵衛。一軒は明店
なり) 青木常左衛門、足立左内、麻田立達来問。頼山
十兵衛御代官手代恒川原治大坂より神崎迄街道を談す
坂部方へ遣す。大岡藤二来る。

同二十五日 同所逗留 間清市郎来る。伊勢山田磨
師山口久太郎扇子持参。午後より麻田立達へ色半
切 五十枚。青木常左衛門へ小菊紙十帖、菓子一箱。
足立左内へ小菊十帖持参して見舞に越す。それより天
満天神へ参詣し、七ツ頃に帰宿。阿州家土関権治郎殿
頭一箱持参見舞。少前碓富菊郎も来る。一同に帰る。
関権治郎は坂部へ立寄。淡州東海辺片側を測。阿州へ
渡る事を相談す。

同二十六日 同所逗留 頃どもを所々見物に出す。
七ツ前、関氏へ取部、柴山、下河辺、青木、福生一同
にして見舞。尤、火の見に登て山々を測、夜に入て始
る。

同二十七日 大坂天。同所逗留。松平阿波守留主居
森甚作名代小林好之助来る。麻田立達来る。筆十対を
贈る。午時より雨、夜に至て大雨。足立左内眷に来る。
羊羹を贈る。間清市郎日々来る。

同二十八日 朝晴。又戻る。関権治郎、碓富菊郎、
間清市郎、麻田立達来る。大岡藤治郎より扇子三本、
羊羹を贈る。(前日 此方より小菊十帖遣す)、足
立左内より生薑漬を贈る。阿町奉行所へ我等、坂部
兩人出立届に出る。帰宿後 関氏へ暇乞に行。

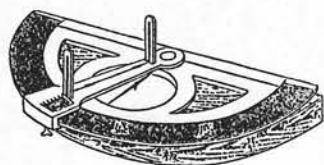
同二十九日 朝より晴天。六ツ半頃 大坂呉服町
会所出立。(関権治郎、碓富菊郎、麻田立達、間清

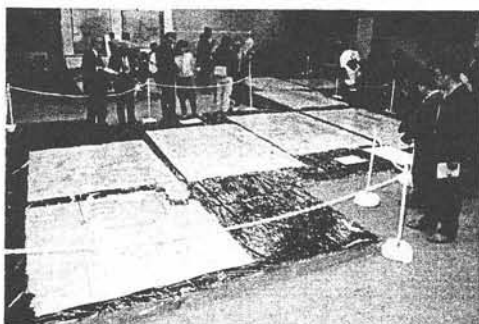
市郎、大坂出端 北野村迄送る、川岸村より渡初、
北野村、南浜村(地先斗 人家は右方三四町奥)、下
三番村(枝郷新家、光立寺村(新家、成小路村(此
村先に渡場あり。川幅九十四間十三という。中津川
の流。即 船渡し)、此村入口に 右に小嶋新田あり、
家十軒斗。木寺村(地先一町余居村は、東方十町斗
引込む。郷村、今里村、三津屋村と二ヶ村は御料。
加嶋村(同上 枝郷竹嶋)、加嶋村流作新田、神崎村
持。神崎川(幅三十六間) 船渡し。八ツ前神崎村、
又 駅着。止宿山方八十郎(一軒にて不足に付、外
宿 高橋 兵助。川端へ松平遠江守家土国役堤方支
配赤川碓市鎭にて出迎。曾後同家土津久井与惣治出
る。八ッ後郡代外谷郷右衛門見舞に出る。神崎村は浪
津国川辺郡なり。

同晦日 朝大曇天。見合居る内に雨降出し逗留。暮
より夜に至りて大雨。

三月朔日 朝曇。六ツ半後 神崎村出立。西川村
(枝郷 西ノ口尼ヶ崎領)、次屋村(枝郷 中間本村は
左。青山喜右衛門知行所)、小中嶋村(石原庄三郎御代
官所)、瓦宮村(阿部播磨守領分、下食満村(御料所石
原安部外記知行所)、中食満村(御料所 石原御代官所
大橋与三右衛門知行所)、田中村(御料所 同前)、万陀
羅寺村(近衛殿領 青山下野守領)、清水村(同上)、猪
名寺村(田安殿領)、是より伊丹郷植松村(近衛殿領)、
古野田村(同領)、新野田村(同領)、高畑村(同)、外城
村(同)、伊丹町(同)、円正寺村(同)、昆陽口村(同)、
北小路村(此間に 又 伊丹天王町あり)、大広寺村
(伊丹郷にて阿部播磨守領分也)、合 伊丹郷十ヶ村外

に外寄村(往來地先なし。東へ入込し村也)。北中少
路村、南中少路村(同断。西へ入込村也)、都合 伊
丹郷十三ヶ村也。それより大鹿村(此所 此度の測
留印杭を残置。即 山崎街道追分也)、千僧村、昆陽
村(又 駅、九ツ頃に着。(中食は伊丹町会所)、止
宿狭少家に付二軒。(本陣 川端七右衛門 脇 松
村玄達、今朝 神崎出立の節、尼ヶ崎郡代外谷郷右
衛門、外に津久井与惣治途中に待居て挨拶。当村着
後、阿部播磨守家土松本筑蔵當村に待居 村役人を
以 御用向を問。即 村役人へ別に御用向も無之旨
申遣す。





日本初公開されたペイレ氏の伊能中図

つ依然ナツ



伊藤 英雄氏

倉庫の屋根裏で発見

伊藤氏

わたしは伊能図の正・副本を焼失していたことは知らず、つい最近のことだ。このように貴重な資料が出現したことは大変な出来事だ。

わたしは伊能図の正・副本を焼失していたことは知らず、つい最近のことだ。このように貴重な資料が出現したことは大変な出来事だ。

わたしは伊能図の正・副本を焼失していたことは知らず、つい最近のことだ。このように貴重な資料が出現したことは大変な出来事だ。

わたしは、自分自身が、伊能図の正・副本を焼失していたことは知らず、つい最近のことだ。このように貴重な資料が出現したことは大変な出来事だ。

わたしは、自分自身が、伊能図の正・副本を焼失していたことは知らず、つい最近のことだ。このように貴重な資料が出現したことは大変な出来事だ。

わたしは、自分自身が、伊能図の正・副本を焼失していたことは知らず、つい最近のことだ。このように貴重な資料が出現したことは大変な出来事だ。

「所有者イブ・ペイレ氏夫妻を困んで」

伊能 忠敬 生誕 250周年記念事業

フランスにあった伊能図を公開し、討論会

◆質疑討論会◆
イブ・ペイレ氏(フランス・国立農業高等専門学校教授)
ニコル・ペイレ氏
金窪 敏知氏(財団法人日本地図センター理事長)
清水 靖夫氏(法政大学講師・立教高等学校教諭)



渡辺 孝雄氏

132人の作業記録 克明に

伊能図の作成には、132人の作業記録が克明に記されています。これは、伊能図の作成過程を詳しく知るための貴重な資料です。

伊能図の作成には、132人の作業記録が克明に記されています。これは、伊能図の作成過程を詳しく知るための貴重な資料です。

伊能図の作成には、132人の作業記録が克明に記されています。これは、伊能図の作成過程を詳しく知るための貴重な資料です。

記念講演◆絵図に描かれた伊能忠敬の測量風景

果立岬高等学校教諭・渡辺 孝雄氏

伊能忠敬の測量風景は、絵図に描かれています。これは、伊能忠敬の測量活動の貴重な記録です。

伊能忠敬の測量風景は、絵図に描かれています。これは、伊能忠敬の測量活動の貴重な記録です。

伊能忠敬の測量風景は、絵図に描かれています。これは、伊能忠敬の測量活動の貴重な記録です。

伊能図探究

七

伊能日本図探究会

伊能図見て歩き (一)

東京大学総合研究資料館蔵 伊能中図

(平成七、十、十八、調査)

東京大学総合研究資料館は関東を除く伊能中図七舗を所蔵する。いづれも襖仕立てで、接合記号のコンパスローズの中心線まで、あるいは経緯度の文字までの部分を見ることができる。

中部、中四国、北九州、南九州、奥州の五舗は、針穴が鮮明で描図も良く、記入事項の豊富な副本である。蝦夷東、蝦夷西の二舗は、針穴のない写本で、描図形式が他の五舗と異なりやや粗で、彩色も淡い。経緯線、方位線のほか、カナ書きの地名、天測点、宿駅、のみを示す。

東京大学総合研究資料館の伊能中図(以下東大中図という)は、時期、制作者を異にする二群の伊能図の集合と考えられるが、これらの来歴は定かでない。地理学教室の米倉教授によると「もと、理学部の事務室にあったものを、地理学教室で、戦後、修復して襖仕立てとしたもので、詳しい経緯は分からない。何らかの機会に東大に持ち込まれ、そのまま放置されたのではなからうか。」という。

また、整備をされる際、東大に在職し関与された現北海道大学の羽田野教授も来歴については分からないとのことである。

これまで伊能図の研究者である大谷、秋岡、保柳の各氏とも、東大中図について触れられたことはない。しかしながら、五舗の副本は、

東京国立博物館の中図と比較して、彩色は淡彩であるが、天測地点、その他記号など、記入事項は充実しており、完成度は高い。もしかすると、関東大震災で焼失したとされている伊能家提出の副本の一部が残っていた可能性がある。

東大中図を良く見ると、図縁の破れ、穴あき、虫食い、なども結構見られる。発見されたときはかなりひどい状態にあったことが予想される。補修にあたり、裏打ちや軸装でなく、襖状に固定し戸棚に収納したのは、扱いは不便にはなるが、安定な保存を期待したものであろう。

五舗に共通な特徴をあげる。方位線、経緯線、経緯度、国名(二重枠)、郡名(二重枠)、宿駅、城下、国界郡界、神社、湊、天測地点、などを記載する。寺院には名称だけで記号のないもの、記号があつて名称のないものなどがごく一部にみられる。文字は丁寧な達筆。山景の緑は淡彩である。

中部 縦三元×横三・五糧 サイズは襖表面部(接合記号の中心相互)。一番綺麗である。

中四国 縦三七五×横二三・五糧 虫、傷なし。大山寺、紀三井寺など、寺名はあるが記号はない。

北九州 縦四四×横二六糧 図縁に破れ。傷二カ所(十糧、×十五糧程度)。読図に支障はない。中央部少し変色するが汚れ少ない。

南九州 縦二五糧×横二五糧 虫、損傷はない。

奥州 縦三〇糧×二六糧 中尊寺に寺院記号がある。瑞巖寺は寺名がないが、記号がある。傷少なく虫ほとんどない。

方位線の本数は、つぎのとおりである。

蝦夷大島へ集中する方位線	東大中図	十二本	東博中図	九本
蝦夷小島へ々	"	十二本	"	十本
岩木山へ々	"	十三本	"	十一本

蝦夷東および蝦夷西の二舗は、針穴がないほか、他の五舗よりさらに淡彩で、傷み、虫食い、汚れがある。元折本。全体に退色が強い。著名な山岳を描き、山裾に霞の描写がある。(本州の五舗にはない) 緑が淡く、宿駅の○印が大きい。蝦夷西は、他の中図にない北蝦夷(樺太)の一部が描かれている。また、蝦夷大島、蝦夷小島は東博中図では奥州の部にあるが、本図は含めている。経緯線はあるが度数の記入がない。など五舗とは明らかに異質のものである。

本調査では、国土地理院の長岡地図部長、本会理事の清水靖夫氏のご援助を頂きました。誌上にて御礼を申し上げます。

伊能三郎右衛門家蔵 (自蔵)

測量下図等

(平成七、九、四、調査)

伊能家の地図は、主要なものは殆ど伊能忠敬記念館に寄贈されたが、今なおつぎのような伊能図を所蔵する。中でも浅草司天台と深川黒江町間の図は大変興味がある。

(一) 伊能図断片

ア、津軽領 鯨ヶ沢付近： 鼠ヶ関、鯨ヶ沢、早田村等が見える。

第十七図浜中村より大川村と書かれている。着色。一枚。享和二年九月測量部分(県史料、測量日記三頁)の断片。針穴あり。

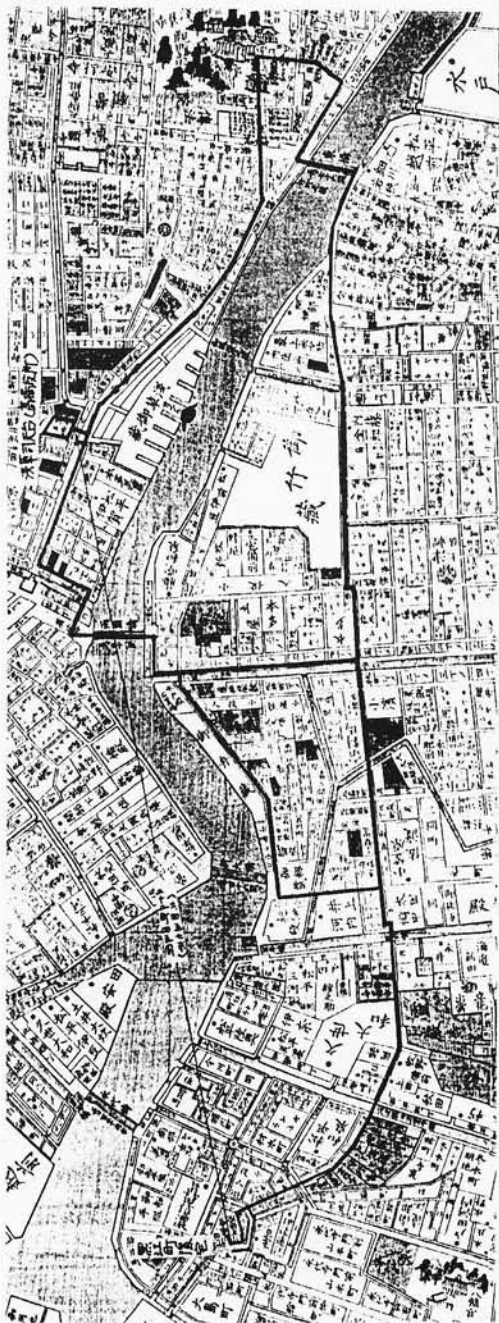


東京大学総合研究資料館蔵 伊能中図 中四国図 (部分)

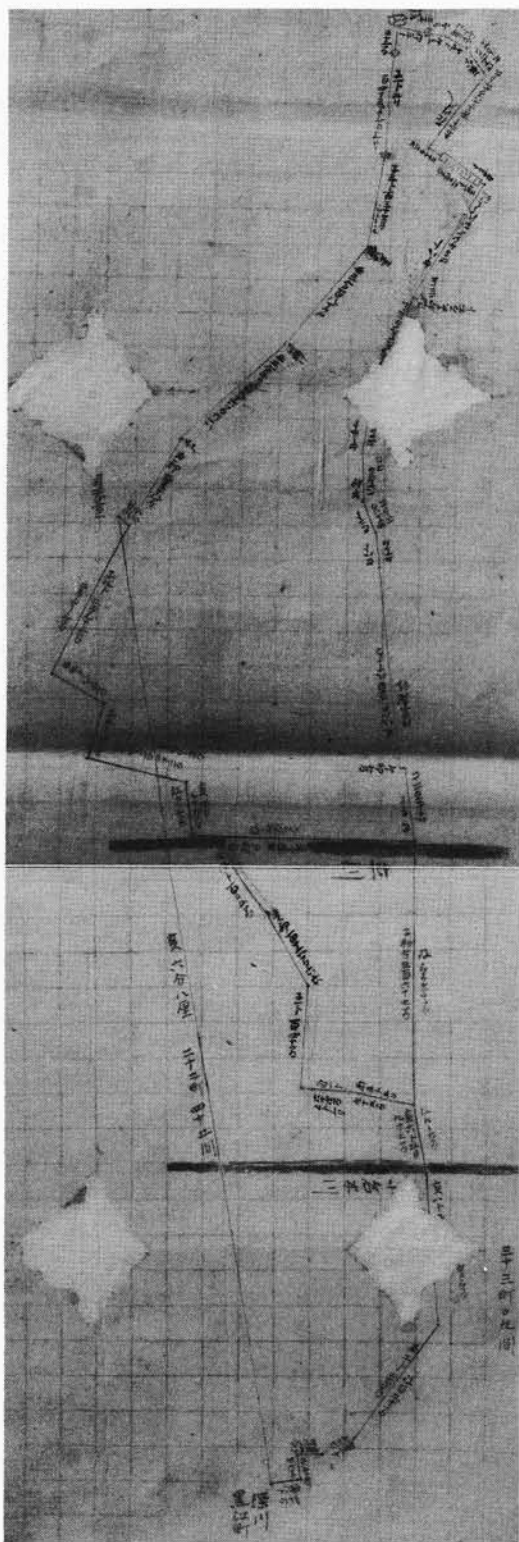
江戸図の上の測量経路

黒江町の隠宅と浅草暦局間の測量図

蝦夷地測量以前、高橋至時が地球の大きさを知るため、緯度1分の距離を知りたがっているのを聞き、忠敬は持ち前の実行力で、黒江町の隠宅と浅草暦局間の距離を歩測により決定するとともに、両地点の緯度を正確に測り師匠に報告したという。



黒江町（隠宅）と浅草司天台間の測量図



イ、福生、拝島辺：着色。一枚。領主名朱書き。大図の形式。針穴あり。
ウ、津軽、浅虫、小湊辺：着色。二枚。針穴あり。享和元年十月測量部分（県史料、測量日記二頁）

エ、七の戸、野辺地辺：着色。三枚。針穴あり。
オ、当別、ミツシ、イズミザワ、サツカリ（蝦夷地）：着色。針穴なし。寛政十二年五月測量部分。

(二) 測量下図

ア、地域不明：九州の一部か。

イ、島根、安来 四×三〇〇

ウ、広瀬、母里町 四×三〇〇

エ、浜名湖周辺 五×六〇〇 浜名湖周辺に測線があり、姫街道に測線がないので、文化二年以降で、文化五年測量以前。

オ、恐山付近断片 四×五〇〇程度 一枚

カ、青森県 平館付近 三角状の断片

キ、浜名湖より駿府 四×六五〇

ク、嬉野 五×三〇〇

ケ、諫早 肥前従音成村島原巡り。

コ、深川黒江町より浅草司天台間の測量図 一枚

(三) 深川黒江町より浅草司天台間の測量図

朱、水色のある測量図。測量開始以前のものか。浅草司天台と深川黒江町間で距離を測り、緯度一分の距離を試算したと伝えられるが、当時のものと思われる図。 三三×六〇〇。

(四) 沿道風景図

ア、天草諸島部分 二巻。 一巻は十米前後。

イ、青森付近 二枚。

エ、下北半島 二枚。

山口県文書館蔵 伊能大図

(平成七、十、二四、調査)

山口県文書館の毛利文庫に、御両国測量絵図として所蔵する七枚の伊能図は、防長両国の範囲の針穴の鮮明な大図である。七舗の構成はつぎのとおり。

第1	縦一五×横一六五	赤間関より角島
第2	一五×一七〇	小郡より三隅村
第3	一六×一七〇	三田尻より福井郷、津和野
第4	一七五×一八〇	北岸、奈古村から小濱村
第5	一五×一七五	熊毛郡、玖珂郡
第6	一七五×一五五	八代島
第7	一七五×一五五	内海の離島、および凡例

保柳睦美著「伊能忠敬の科学的業績」所載の文政四年大図目録において、防長両国の大図は一六九号、一七三号、一七四号、一七五号、一七六号、一七七号、一七八号の七舗となっており、枚数は一致する。しかしながら、第一図とこれに相当する一七八号を比較すると、第一図は赤間関以北の毛利領を主体とするのに対し、一七八号の範囲は赤間関より筑前若松浦、豊前小倉まで含んでおり毛利領は僅かである。図の分割方法が一致しない。

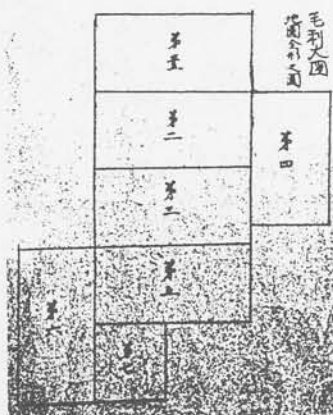
方位線、経緯線はない。測線、地名のほかに、国界（黒色の――）、郡界（黒色の○）、村界（黒色の●）国名、郡名、領分境、領主名を記す。萩、津和野の城下は城の絵を描き、岩国、徳山等の分家は館を描く。最終版大図は標準品がないので、何れが正規なものか分からないが、国界、郡界の記号を黒で描く点は他の大図と異なる。

山景の緑は黄味が少ないが濃く鮮明。海岸の砂地は黄色、平野部は

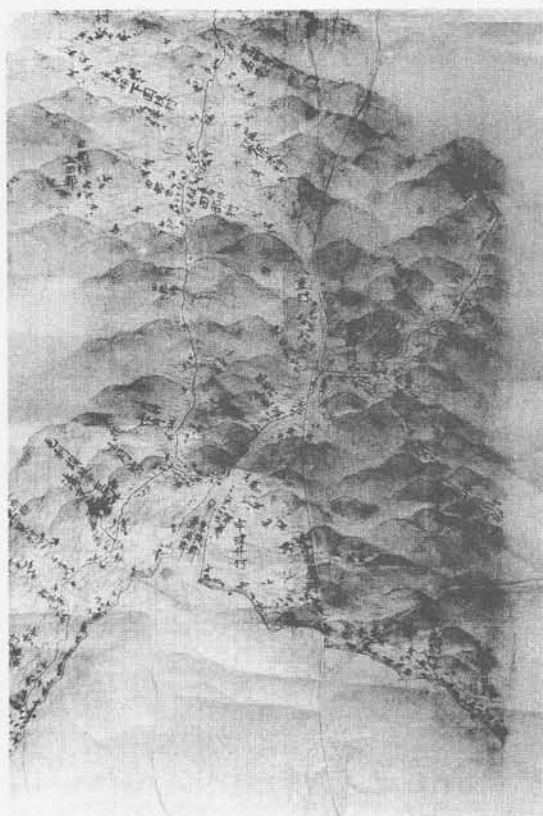
ピンクと茶の中間的な色、森、林、田畑、沿道の家並を写生する。文字の墨は少し薄いが達筆、書体は他の伊能図に見られるものと類似する。接合記号があり、折り跡がわかる。天測地点の記入はない。社寺の記号は少ない。寺名があつて△印がないもの、神社の印があつて名称がないものがある。宿場は記号でなく、○○宿と表示。

汚れ、傷、虫食いは殆どない。裏打ちはなく、針穴は裏まで通っている。透かしてみると、測線のみでなく、沿道の個々の山々の頂上、田畑の印の位置、海岸線にも針穴が連続し、風景まで針穴で写されたもの。針穴がありながら、一部の測線の描き忘れもみられる。

以上を通して考えると、本図は文政4年大図の忠実な副本ではなく、毛利藩の希望により伊能測量隊で、防長両国の範囲の大図から他領の部分を除き、描図範囲を少し変更して副本と同じように作成した大図ではないだろうか。その際、国界、郡界等の記号の色を変えて副本と少し異なることを表現したようにおもわれる。いずれにしても、文政四年大図は殆ど残っていないので、貴重な存在である。文政四年大図として整理して良いと思われる。なお、測線の分布は文政四年中図と比較して脱落している部分はないから、作成時期は最終版の完成後である。



毛利大図



山口県文書館 毛利文庫蔵 伊能大図(部分)

お知らせ

本誌の編集委員はつぎの各氏にお願いしております。

安藤由紀子 (元国会図書館憲政資料室)

伊能 陽子 (伊能家)

香取 良 (佐原市教育委員会教育次長)

小島 一仁 (佐原市史編纂委員長)

斉藤 仁 (学習院女子短大教授)

佐久間達夫 (元伊能記念館館長)

清水 靖夫 (立教高校教諭、法政大学講師)

芳賀 啓 (柏書房取締役編集長)

渡辺 一郎 (伊能日本図研究会代表、会社会長)

(五十音順)

伊能忠敬研究会入会案内

一、本会は、つぎのような活動をおこなっています。

(一) 会報の発行(当面、年四回)

『季刊 伊能忠敬研究 史料と伊能図 「伊能図探究」継承』
各号三六頁。伊能図探究を継承するので、初号は第七号からとなります。

(二) 年次大会の開催

年一回研究発表会を佐原等で開催します。一般講演、各種の研究発表のほか史料、伊能図の展示説明等を併催します。

(三) その他付帯する事業。

二、入会方法、会費等

(一) 入会申込は、住所、氏名、職業、専門、電話番号、FAX番号などを書いた申込書を左記にお送りいただくとともに、小為替または銀行送金等で年会費六千円を御送金下さい。

(二) 申込先 〒一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八
飯田橋ハイタウン五〇四

伊能忠敬研究会(事務局 渡辺一郎)

(三) 送金先 東海銀行飯田橋支店 普通一〇八七五四八
伊能忠敬研究会(イノウタダタカケンキュウカイ)あて

投稿規定

一、会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお任せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

二、一頁は、二段組三十一字×二六行×二段で一六二二字、三段組二〇

字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこの中に含まれます。分量を御考慮願います。

三、原稿はワープロ入力したテキストタイプのプロッピデスクでお送りください。その際、必ず出力したプリントを添付願います。また、提出した原稿は必ず控えをおとり下さい。返却は致しかねます。

編集後記

伊能忠敬研究九六年新春号がやっとまとまりました。昨年十一月のフランス中図展示会で入会頂いた方には長い事お待たせとなりましたが、本号をどのようにお読みいただけたか心配です。さて、色々調べていると、伊能忠敬と伊能図については判らないことが少なくありません。編集子が疑問に思うことを列挙してみます。

一、明治政府に幕府から伊能図は引継がれなかったのではないかと、何故フランスに最高級の伊能中図があるのだろう。

二、伊能家より再度献呈の伊能図は、東大に保管中に関東大震災で焼けてしまったというが、東大総合研究資料館にある伊能中図七舗のうち五舗は、そのとき焼けなかった副本ではないだろうか。

三、戦後岡山の池田家から出た伊能図は何処にいったのだろう。

四、成田山仏教図書館の伊能中図は何処から伝えられたのだろう。

五、天理大学の伊能中図はどこから出たのだろう。

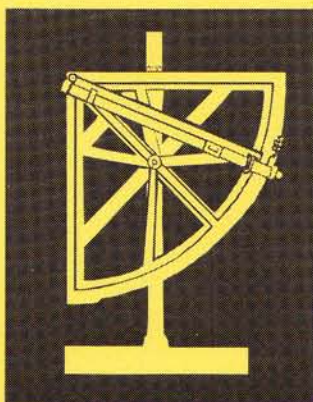
六、学習院大学付属図書館の伊能図の出所も未解明である。

など、いくらでも挙げることができるようです。地図史料のほうは新事実が沢山出てきそうだが、古文書の世界にも不明の点が多い。やたらなことを云ってお叱りを受けるといけないので、もう少し勉強してからにします。ご意見をお待ちします。(渡)

THE INO TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INO'S MAP AND WRITINGS

No.7 Spring 1996



MESSAGES

WATANABE Ichiro, The Ino Tadataka Society	1
NONOMURA Kunio, Deputy Director General, Geographical Survey Institute	2
SUZUKI Zen-ichi, Mayor, Sawara City	3
KOJIMA Kazuhito, Chairman, Editorial Committee, The History of Sawara City	4
KATORI Kiyoshi, Deputy General Manager, Sawara Board of Education	4
SAKUMA Tatsuo, Formerly Manager, Ino Tadataka Memorial Hall	6
INO Yoko, Descendant of Ino Tadataka	7

MATERIALS :

Letters Related to Ino Tadataka	ANDO Yukiko	9
Another Household Precepts of Ino Tadataka	WATANABE Ichiro	14
INO's Land Survey Diary		
1. An Exlanation	Editorial Staff	16
2. His Survey Route on a Recent Map	SHIMIZU Yasuo	16
3. Commentary on His Diary	WATANABE Takao	18
4. The Sixth Survey Diary (1)	SAKUMA Tatsuo	21

TOPICS

Forum on Ino's Medium Scale Maps Found in France	26
The Search for Ino's Maps	Reserch Group 28

OTHER NEWS	32
------------------	----

Edited and Published
by
THE INO TADATAKA SOCIETY